

山田遺跡

姫路バイパスにともなう発掘調査

昭和50年3月

建設省姫路工事事務所
太子町教育委員会

山 田 遺 跡

姫路バイパスにともなう発掘調査

昭和 50 年 3 月

建設省姫路工事事務所

太子町教育委員会



土壇Ⅵの土器出土状況

序 文

現在、建設省姫路工事事務所では国道2号姫路バイパスの建設を進めております。阪神地域と中国、四国、九州とを結ぶ主要幹線道路である現国道2号は、姫路市周辺において遠距離輸送量の増加、姫路市内及び播磨工業地帯から発生する地域間交通量の増大により、容量的に限界に達し、慢性的交通停滞、事故の多発等の問題が深刻化しております。姫路バイパスはこれら交通混雑の緩和、とくに通過交通の市街地通行の回避を目的とし、あわせて将来の交通需要に見合う幹線道路網の一環として自動車専用道として計画したものであります。

その路線は加古川バイパスの終点である高砂市阿弥陀町魚橋の高砂北ランプを起点とし、現国道の南側を西進し、姫路市内の南部を通り、兵庫県揖保郡太子町山田の太子東ランプで現国道に接続する延長18.4kmであります。

本姫路バイパスは昭和35年に調査を開始し、昭和41年に路線を決定し、昭和45年10月に工事に着手、昭和48年7月には、姫路市街地南部の第1期工事区間5.6kmを暫定断面で供用を開始しておりますが、全線供用の早期開始をめざし、現在鋭意工事中であります。

さて近年における道路建設は従来からの技術的な難易、工事費の比較等の線的な判断に加え、周辺の土地利用計画との調和、環境の保全、文化財の保護等の面的な判断を加えることが要請されております。姫路バイパスの建設にあたって、これらの要素を十分に検討し、特に文化財については、既に発見されている遺跡をさげ、また踏査を行なう等十分な注意を払っておりますが、埋蔵文化財についてはその性格上予知は困難なものがあります。

本報告書に記載されている山田遺跡も昭和48年7月に姫路バイパスの延伸として計画している太子バイパスの予備調査として踏査を実施中に、上田哲也氏により山田ランプ付近の切土工事中の現場において発見されたものであります。

この不時発見された遺跡について、建設省近畿地方建設局では昭和48年度および昭和49年

度において、兵庫県教育委員会の御指導のもとに太子町教育委員会に発掘調査を委託し、上田哲也氏の御協力により調査を実施いたしました。調査成果に基づき文化財専門委員理蔵文化財部会の審議を受け、兵庫県教育委員会よりの御指導により工事を継続し、文化財は記録保存とすることになりました。

本報告書はこの発掘調査の結果を集録したものでありますが、消え去った文化財の姿を後世に伝えるとともに、今後の研究に利用されることを希望するものであります。

最後に、山田遺跡の発掘調査に御協力頂きました、兵庫県教育委員会、文化財専門委員文化財部会、太子町教育委員会ならびに発掘および調査報告書を取りまとめられました上田哲也、中溝康則両氏を始め、関係者の御苦勞に感謝いたしますとともに、心より御礼を申し上げます。

昭和50年2月

建設省姫路工事事務所所長

仲 西 茂 夫

目 次

1	はしがき	7
2	遺跡の立地	11
3	調査の契機と経過	15
1	調査の契機	15
2	調査の経過	16
3	発掘日誌	18
4	遺 構	21
1	住居址	21
2	土壙群	24
3	石組遺構	26
4	溝状遺構	28
5	出土遺物	31
1	弥生式土器	31
2	石器（石鏃、石錘）	41
3	鉄器（鉄釘、鉄斧）	42
6	むすびにかえて	45

図 版 目 次

図版第1図	山田遺跡附近地形図	49
図版第2図	山田遺跡の旧地形図	50
図版第3図	山田遺跡調査時の地形及びグリッド配置図	51
図版第4図	山田遺跡の遺構分布図	52
図版第5図	山田遺跡の土層図	53
図版第6図	山田遺跡住居址実測図	54
図版第7図	石組遺構Ⅰ	55
図版第8図	石組遺構Ⅱ	56
図版第9図	石組遺構Ⅲ	57
図版第10図	土壌実測図（Ⅰ—Ⅲ）	58
図版第11図	土壌Ⅴ実測図	59
図版第12図	土壌Ⅵ、土器出土状況実測図	60
図版第13図	壺形土器実測図	61
図版第14図	同上	62
図版第15図	同上	63
図版第16図	甕形土器実測図	64
図版第17図	土器の底部実測図	65
図版第18図	高杯、器台形土器実測図	66
図版第19図	石器（石錘、石鍬）鉄器実測図	67

写 真 目 次

写真一1	遺 跡	(上) 北方斜面より見た遺跡と南方の景観……………	68
		(下左) 東方より見た遺跡と西方の景観……………	68
		(下右) 北側より見た近景……………	68
写真一2	遺 跡	(上) 調査前の状況 (東より) ……………	69
		(下) 東側より見た近景……………	69
写真一3	石 組	(上) 石組Ⅰ……………	70
		(下) 石組Ⅰ……………	70
写真一4	石 組	(上) 石組Ⅱ……………	71
		(下) 石組Ⅲ……………	71
写真一5	土 壙	(上) 土壙Ⅴ……………	72
		(下) 土壙Ⅲ……………	72
写真一6	土壙Ⅵ	(上) 土器出土状況……………	73
		(下) 土壙の断面……………	73
写真一7	竪穴式住居址	(上) 住居址の壁……………	74
		(下) 住居址の全景……………	74
写真一8		(上) 住居址に続く地山の切断状況……………	75
		(下) 住居址に続く地山の切断と土器……………	75
写真一9	溝と器台	(上) 溝状遺構……………	76
		(下) 器台形土器出土状況……………	76
写真一10	壺形土器	……………	77
写真一11	甕形土器	……………	78
写真一12	高杯・器台形土器	……………	79

写真—13	土 器	(上) 土器の底部	80
		(中) 櫛描波状文	80
		(下) 刷毛目仕上げの種々	80
写真—14	土器と石鏃	(右上) 土製品	81
		(左上) 握り突手	81
		(右下) 石鏃	81
		(左下) 近世の土製品?	81
写真—15	鉄 器	(上) 鉄斧?	82
		(下) 不明の鉄器	82

1 はしがき

兵庫県揖保郡太子町山田の山田遺跡の発見は非常に早い。昭和21年発行の浅田芳朗、今里幾次両氏による「播磨国石器時代地名表」によれば、原田正彦氏が人類学雑誌299号に太田村太田山田に弥生式土器、石鏃の発見を報告され、直良信夫、島田良清、浅田芳朗氏が山田、小丸山で弥生式土器、石鏃、石錘、石匙、石庖丁、磨石鏃、土版を同じく藪山で石鏃、太田陸郎、今里幾次両氏によって山田雁谷山で石鏃、石錘、打製石庖丁を、穂積勝次郎氏によって山田中山に石鏃、石匙、砥石が報告されている。

第2次世界大戦中の開墾によって山々が切り開かれた時にも土器が多量に出土し、地元の小学校に土器が持ちこまれたり、教育委員会にも土器が保存されている。山田地区には約30基の古墳があって、その多くは古墳時代後期の横穴式石室墳ではあるが、なお検討を加えねばならない古墳もあり、上記の石器群の報告や当地出土の土器の全体を観察するとき、この遺跡は縄文文化の頃から人類が住みはじめ、奈良時代まで断続的に人類の文化が残されていることを示している。

最近の太子町では考古学的発掘が次々と行なわれ、山陽新幹線の敷設にともなって、川島遺跡、立岡遺跡（川島・立岡遺跡、太子町教育委員会）、常全遺跡（兵庫県埋蔵文化財報告第4冊）の調査等で縄文、弥生及び古墳時代の貴重な発見が報告された。常全遺跡では縄文晩期後半以降弥生全時代の遺物が発見され、川島遺跡では弥生中期後半の方形周溝墓、円形周溝墓の発見に続いて、古式土師器を伴う竪穴住居址2戸が発掘された。播磨に於ては今のところ播磨・大中遺跡（播磨・大中、播磨町教育委員会）に続いて2番目の土師式住居址であって、今後の研究に欠かすことのできない資料である。立岡遺跡では弥生後期の竪穴式住居址が発掘され、播磨国風土記に記す揖保郡内の新宮町宮内遺跡（新宮・宮内遺跡調査報告、新宮町教育委員会）に次いで2番目の弥生後期の住居址であって、住居Ⅰが方形竪穴式住

居、住居Ⅱが隅丸方形プランを示しており、宮内遺跡の住居址が円形プランであることと比較すると、その変遷をたどるとき、弥生後期に円形から方形プランに移行すると云われる一般的な通説に合致している。

川島遺跡に接する原の黒岡山において、弥生後期後半の墳墓（播磨の土師の研究、東洋大附属姫路高等学校）を発見した。土地所有者との間で保存が確約されたので、細部の調査は行なわなかったが、丘陵上を割石積の列石で方形に囲み、内部に大型の壺棺等を埋葬するものであった。川島遺跡の方形、円形周湊墓からの変遷及び次の古墳時代へ移行する意味合いから考えても注目されねばなるまい。

その他調査の数は数多くあげられるが、いずれにしても太子町の開発がいよいよ急進してきたことを物語るものであって、兵庫県教育委員会文化課によって行なわれた埋蔵文化財の分布調査表を見ても、又その後の踏査においても、丘陵、平地部をとわずほぼ全域に土器片が認められ、その豊富さは、目をみはるものがある。しかし上記のように、調査が開発に伴って偶然に行なわれた遺跡の一部についてのみの結果であって、上記の諸遺跡の場合にも、未調査部分の面積の方がはるかに大きく広いということを忘れてはならない。

この問題は山田遺跡についても指摘されるところであり、第1図に示すように北部の丘陵地帯が北側から削り取られて、弥生中期後半の竪穴式住居址が7戸も切断されて風雨にさらされている。このままで、無計画な開発が今後も行なわれるならば、遠からず貴重な歴史的文化遺産は消滅の危機にあると言える。

既にふれたように山田遺跡は縄文時代以後断続的に永々として人類文化をつちかい育んだ結果を私達に教えるものであり、弥生時代について見ても規模の大きさにおいて、又内容においても目をみはらすものである。後述するように周囲を山で囲まれた地を選んで、ここに生活の場を求めた弥生中期後半の祖先の生活を考えるとき、歴史の重みを感じずにはおれないのである。

（上 田）



山田遺跡の航空写真(×印が調査部分)

2 遺跡の立地

本遺跡は、兵庫県揖保郡太子町山田の北山に地位する。

兵庫県の西部、揖保川によって形成された西播平野の東南端、姫路平野と境界するところにある。しかし山田村は、揖保川水系の小河川、大津茂川によって形成された沖積平野にあるのではなく、四方を洪積世の山々で囲まれた袋状谷間盆地（ $500m \times 500m$ ）にある。当遺跡は、盆地をとりまく山の1つ、北山山塊の南東斜面の中腹（標高 $30 \sim 34m$ ）に立地している。

当遺跡の北は、標高 $250m$ の城山山塊が、南は、標高 $216 \sim 130m$ の京見山山塊が、ほぼ東西にL字状に $5.3km$ にわたって連なり、東は、両山塊が標高 $40m$ の高さで連なっている。西は、城山山塊から南へ張出した標高 $139m$ の北山、同 $40m$ の黒岡山、天満山などの山々が、屏風を立てたように並んでいる。この盆地の通路として南西部が、わずか $200m$ 開いているだけであるが、そこには福井大池（ $700m \times 400m$ ）と呼ばれる大湿地があり、円滑な通行を妨げており、まるで自然の要塞のような地形に立地している。

農耕に関しては、東西にそれぞれ $2.2km$ 程離れて夢前川、大津茂川が流れており、水田経営に適した肥沃な土地があるのに、なぜこのような狭い、水利に不自由な場所へわざわざ住居を構える必要があったのかは、まったく不明である。しかし水は皆無ではなく、櫛歯状の山々の谷間には湧水があり、現在では谷頭を塞止め、溜池を作り水田経営をおこなっている。古代においても、この水で谷頭水田経営を行なったかもしれないが、溜池は後世のものであり、またその量は、溜池なくして水田経営に充分必要な量であったとは考え難い。

交通に関しては、現在国道2号線、山陽新幹線が通過するなど交通の要所となっているが、古代においては上記のような地形が、円滑な通行を妨げたようで、大宝律令に定められた駅制の山陽道は、城山の北背面、飾西、太市、布施を通過しており、現在のように山田峠を通過する街道へと変わったのは、法隆寺の荘園・鶴庄などが発展しはじめた平安時代もなか

ばをすぎるところからであったようである。

以上述べてきた地理的環境から①京見山連山が、瀬戸内海に平行に東西につらなり、当時としては文化伝播路であるはずの瀬戸内海からの眺望を意識的に避けているように感じられること、②しかし、京見山連山から海岸線は、わずかに2 km程度であり、登れば瀬戸内を航行する舟はよく見えたであろう。③生活、生産に適した沖積平野をすて、水田経営には不適當、生活に不便な標高30m以上の高地に住居を構えている。④適度な湧水がみられる。というようなことが言える。

沖積平野において、前期新以後、拡大発展を続ける弥生遺跡の中であって、中期後半（中期Ⅳ・Ⅴ）（註1）の時期に限って、今まで水田経営の主体となってきた沖積平野から離れ（註2）、水田経営に不適當であり、生活に不便な山間に生活の場所がどうして移動しているのか、そしてそれはどうして後期へと連続しない一時的なものであるのかについて、同時期の高地性住居址と考えられる太子町檀特山（註3）、北竜野（註4）、新宮町天神山（註5）、飾西東山（註6）、姫路市名古屋山（註7）、加古川市平山（註8）各遺跡などに関連して、この時期の住居・集落のあり方について、今後充分慎重に検討してみる必要があるのではないだろうか。（註9）

なお今回の発掘で確認された住居址は1件であるが、〔図1〕のごとく盆地を囲む山々に9件以上の住居址のあることが判明している。しかしこれだけでなく、以前の報告なので詳細は不明だが、同盆地内の小丸山、桃畑、雁谷山、中山（註10）からも遺物の出土があり、住居址の存在を推定せしめる。

（中溝 康則・市村 高規）

註(1) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』第15巻第4号 1969.3

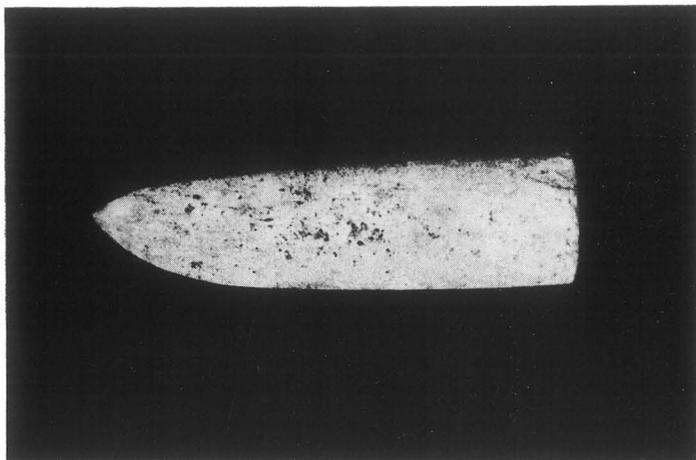
(2) 櫃本誠一『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会 昭和46年3月

- (3) 松下 勝「檀特山遺跡確認調査」『川島・立岡遺跡』
- (4) 加藤史郎『竜野市北竜野弥生遺跡』竜野実業高等学校 1966. 1
- (5) 兵庫県立西播教育センター敷地内 昭和47年 8月調査 住居址 2 を確認 (未報告)
- (6) 註(1)と同じ
- (7) 上田哲也、河原隆彦『播磨の弥生文化』東洋大学付属姫路高等学校 昭和41年 7月
- (8) 註(7)と同じ
- (9) 小野忠熙「高地性集落とその機能」『考古学研究』 第 6 卷第 2 号
- (10) 浅男芳朗、今里幾次「播磨国石器時代地名表」昭和21年11月

3 調査の契機と経過

1 契機

昭和48年7月の頃、現地を訪れた上田が道路工事によって切断された崖の断面に黒灰色の有機質を含む土層の中に弥生式土器片が露出している状



山田遺跡採集の石斧

態を確認し、工事関係者に遺跡である旨を知らせると共に兵庫県教育委員会文化課の是川長氏に連絡をとって遺跡が破壊されている状況を伝えた。

この道路工事は国道2号線の交通緩和のためのバイパス道路の敷設であって、名神高速道路との連結のために神戸高速道路と神戸市須磨区で結合させ、明石、加古川を経て姫路バイパスの終着のインターチェンジの建設工事であって、国道2号線への導入をはかろうとするものである。

第2図に示すように工事に着手する以前の地形は、国道2号線の敷設及び採土工事によって東斜面が削りとられていたが、東北及び北斜面は旧地形を比較的よくとどめていた。しかるに第3図に示すグリッド配置と第2図グリッド配置図とを比較すれば、遺跡の主要部分の大半が工事によって削りとられていることが理解しえるだろう。

その後、兵庫県教育委員会文化課是川長氏と現地で立会し、抱含層の露出している部分を中心に遺構の埋蔵される部分について工事を一時中止して発掘調査を行なうよう指導、助言した。しかるにその後、工事責任側の建設省では文化課に対して遺跡とは認められないという

回答を行なって対立が続き調査の方向にはなかなか進まなかった。昭和48年も年末の頃になってようやく建設省も調査に踏み切ることとなったが、文化課の方にも調査員不足の都合があって、建設省から上田に調査を依頼されてきた。しかし冬期休暇の計画は既にできており、学生諸君と有馬に遺跡分布調を行なうことになっていたの、建設省に理由を伝えて断わらねばならなかった。

その後49年の春になって更に調査の依頼を受け、多淵敏樹氏（神戸大学助教授）と相談をして、調査を行なうことにした。

2 調査の経過

調査の詳しい経過は発掘日誌で記述しているとおりであるが、この調査は春期休暇を利用して行なうことにし、調査は以下に記述する人員で行なった。

調査員＝多淵敏樹（神戸大学助教授）、上田哲也（東洋大学附属姫路高等学校教諭）、中溝康則（加古川市立別府小学校教諭）

補助員＝市村高規、坂口尚人、柳生勝志、向村修一、丸山宗一、上村淳一、和田隆雄（以上東洋大学学生）、竹花宏之（立正大学学生）、加賀見省一（奈良大学学生）、西家静子、佐々木裕子、縄田千鶴子（以上神戸女子大学学生）、志摩幸男、和辻憲一、山本八三、石飛知広、藤岡正、出口博一（以上東洋大学附属姫路高等学校生徒）

作業員＝揖保郡太子町川島の婦人有志7名。

発掘調査に伴う出土遺物の整理は春期休暇時の調査終了時から土器の水洗及びラベル記入を行ない、49年夏期休暇を利用して遺物の実測及び図面のトレスと写真の整理等々出版にともなう作業を行なった。

なお春期に行なった第1次調査の結果は兵庫県文化財専門委員会による審議が太子町教育委員会で開かれ、現地立会調査を行なった後慎重に検討されて、グリット部分及び未調査部

分等を完掘して工事を進めるべきという答審が文化課を通じて、建設省に出された。その指示にしたがって、49年夏に再調査を行ない完了した。整理及び報告書出版に伴う作業及び夏期の第2次調査は上田哲也、中溝康則を調査員に市村高規、坂口尚人、柳生勝志、向村修一、志摩幸男、石飛知広、藤岡正、出口博一、竹花宏之によって行なった。

山田遺跡の範囲は広範囲であって、時代も断続的ではあるが、かなり長く認められる。今回は特に弥生時代中期後半の住居址を中心とした調査であったので、弥生時代に限って、その経過のあらましをたどってみたい。

山田に弥生時代の遺物を発見したのは人類学雑誌 299 号に原田正彦氏が紹介したことに始まり、昭和21年11月に郷土文化学会研究報告第3冊「播磨国石器時代地名表」に於て浅田芳朗、今里幾次両氏等によって、更に詳しい報告が行なわれてから、本遺跡が注目されることとなり、多くの人々が現地を訪れている。そして昭和43年3月、兵庫県埋蔵文化財特別地域、遺跡分布地図及び地名表が兵庫県教育委員会文化課から出版されて、太子町分は上田夏三、上田哲也、河原隆彦によって分担し、山田遺跡の概要と遺物の散布状態を地図に示した。

その後、山田遺跡の斜面が宅地造成工事によって破壊されはじめ、横穴式石室を内部構造とする古墳や弥生時代の住居址が削られた断面に露出するなどして、新聞などにも、破壊の状況が報道されたりした。そして現在までに確認された弥生時代の主とした遺構を示すものが第1図である。地図をみればわかる通り、遺構の主として分布する地区は、盆地状にとり囲む山塊部分の北方、海拔50～60mの頂部及び平端部に多く集中し、馬蹄形状の山麓部分の緩斜面部分にも分布している。特に昭和48年頃に行なわれた北側斜面の宅地造成にともなう頂部切断工事では住居址が並んで切断されており、みるからに痛ましい姿を露呈している。以上のような経過をへて、発掘の運びとなるが、遺跡が如何にして調査されるに至ったかは既に記したとおりである。

発掘調査は詳しく調査日誌によって記述するので、ここでは調査に至るまでの遺跡のあら

ましを記述することにした。私は、山田遺跡がこれ以上破壊されないために、また遺構の分布は今後の詳しい観察によれば、更に多くなるだろうし、拡大すると思われる。今後の啓蒙のためにも、私達の祖先の築きあげた文化財を愛護して、子孫に受け継ぐことも、私達の歴史を正しく知るためにも、無秩序な破壊を中止して、理解と誠意を持っていただきたいと願うものである。

(上 田)

3 発 掘 日 誌

地形測量と発掘の二班に分け作業をしたため、まず最初、地形測量のことから書き始める。

全貌地形測量

地形測量は3月15日から3月20日までに発掘区域とその周辺を合わせた地域を25cmコンタで測量したものである。作業は毎日同じであったが、崖などが側にあるため、困難をきわめた。現場が山の中腹であったので低い方から上部に作業を進めていった。3月22日には平板ポイントの標高を求めるため、標高の出ている国道沿いのベンチマークより比高を算出する。3回行なったが微小な差ながらも数字上くると出たため、2回目の3313.5cmをベンチマークの標高ときめる。

発掘作業及び地区別の測量

作業は春休みと夏休みを利用した約3週間にわたる作業概要のまとめである。

3月15日

グリッドを設定し、A-2、A-3地区の表土剝しをする。

3月16日

表土剝し作業の昨日の続きをする。

3月17日

A-1、B-1、B-2、C-1地区の地山までを掘り下げ、その地山直上より甕1個体分の出土をみる。また、C-1地区の東壁より多数の土器片出土。

3月18日

昨日の続き、B-1では南西端から北にかけて地山検出。B-2では地山と上層に推積している赤色土との分離点を捜し、それを確認しまた地山を検出しながら全面に地山面を見つけていく。

3月19日

A-2は地山を追いかけて掘った。唐古第4様式の土器が多数出土。B-3、C-0の排土作業をする。C-1では午後より甕の出土状況の写真撮影をする。また、溝状遺構の中からの遺物の確認は出来なかった。

3月20日

A-2は昨日同様地山の追求。随所にピットを見る。午後よりD-0、D-1、E-0、E-1、G-0、H-0とグリッドを設定し、G-0、H-0の表土剝しにかかる。

3月21日

C-1の清掃、及び写真撮影を行なった。C-0のブロックを削ったさいに第4様式の大形器台が検出された。G-0は昨日の続きの表土剝しをする。

3月22日

D-0、E-0、F-0、G-0、H-0の前日の続きを掘る。

3月23日

C-0、C-1、C-2のセクションの実測を行なった。G-0では新しく掘ったE、F、G、H地区のトレンチを新しく全面実測図に書き入れた。

3月24日

C-1、C-2は実測の続きを、C-3、G-0は地山までを掘る。

3月25日

E-0、F-0、O-1の土壌の実測を行なった。

3月26日

G-0とH-0間ブロックの取りはずし、及びF-0-1土壌の南北のセクションと土壌の実測を行なった。

3月28日

G、H間ブロックで検出されている土器群のプラン測量を作成し終えた。また、E-0、F-0のセクション、C-2の配石の実測を行なった。

3月29日

昨日の続きのC-2の配石の実測を行なった。A-3、B-3の西壁のセクションをとる。

8月8日

第2次発掘を開始する。

D-1、F-1とその周辺の木々を伐採した。そしてD-1、F-1の表土剝しにかかった。

8月9日

D-1、F-1の排土作業を昨日同様に行なう。H-1の予備トレンチをG-1よりに設定し表土剝しにかかる。

8月10日

F-1、G-1、H-1各トレンチを昨日同様に作業を続ける。

8月11日

D-1、G-1は昨日の続きの作業を行なう。

8月12日

ほぼ発掘作業が終わったので整査を行なった。

8月13日

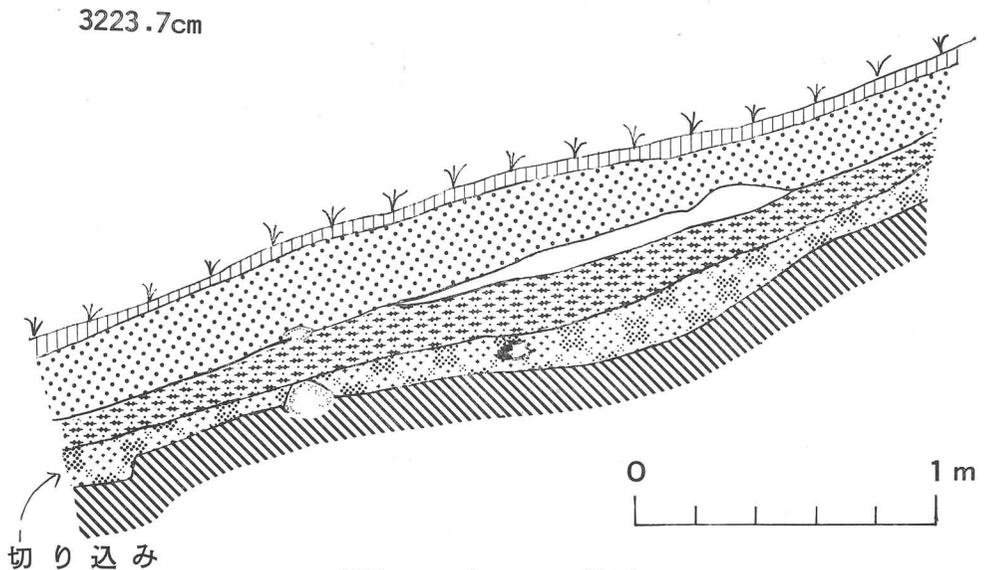
遺構の実測、H-1地区のピットの実測を行なった。

(坂口 尚人)

4 遺 構

1 住 居 址 (第6図、写真7)

住居址はC-0、D-0のブロックにまたがって認められる。第3・5図に示すように住居址の南側上方約5m以上はかなりの急斜面を呈し、第2図に示すように住居址の部分だけがやや緩斜面の平地で更に下方(北東)はまた急斜面を示す。したがってわずかな緩斜面の平地(傾斜角20度)を掘りくぼめて営なまれたものであって、調査部分では約5分の2程しか残存していなかったが、恐らく、削減部分の住居端は若干の盛土で住居床面を造ったと推察される。住居の一辺の長さは310cmを測り、周囲に10~20cm、外壁より10cm、床面より5cm程の深さのU字状の溝をめぐらす。柱穴は1ヶを検出しただけで、直径13.5×13.5cm、深さ23cmのきわめて良好なピットである。床面はかなりの凹凸があるが、ほぼ水平を示す。最も残



挿図1 Fブロック断面

存部分の多いC-0区が住居放棄後の弥生期(土器ではほぼ同様式)に攪括されているので、一方の柱穴や溝の詳細な実態を把握しかねるけれども以上の観察からして住居址であることは確実である。本住居址の残存部分の状態から推して、方形住居であることはまちがいないかろうと思われるが、住居の方位は北を基準にして47度30分東に向っており、特に方位とは関係せず、斜面に向ってほぼ直角に掘りこんで住居をつくっているところから考えると、地形との関係が住居の決定に大きな要因をもったと言える。

住居址の西方に向って、住居址の隅から地山を人工的に切断した幅約30~50cmの平かな径(Path)と推定される部分があり、住居の入口を暗示していると言える。

住居の残存部分の床面には完全な形をした土器は1ヶ体も検出しえなかったが、凹線文を施す器台形土器の他若干の破片を認めた。これらの土器は図版で示すものであるが、いずれも弥生中期後半の時期に推測されるものであって、所謂唐古第IV様式と言われるものである。

こうした土器を伴う住居址を播磨で類別を求めれば、姫路市名古屋山、加古川市池尻に認められ、やはり本遺跡と同じような地形的環境を持っている。上記の遺跡は発掘調査によって確認されたものであって、表面採集で判明している遺跡はかなりの数にのぼるだろう。特にこれらの遺跡は限られた時期にのみ形成する傾向が強く、特に姫路市名古屋山や山田遺跡の住居址の場合には住居址につながる径をつくり、名古屋山の場合には、径に柵列と推定されるピット列が確認されていること、及び住居址が北斜面に造られていることなどはかなり特異な問題を暗示していると言える。

瀬戸内地方の弥生式高地性村落の特質については1959年、小野忠胤氏によって(考古学研究22)論じられ、高地性村落遺跡の垂直的分布で分けられて、比高が300mを越えるもので、展望のよい山頂や高い山腹の小平坦面に立地するものや、50m以上の瀬戸内の交会地等に立地するものと、比高が大体15、6mから3、40mの展望に優れ、登り下りに不便な急峻な斜面の孤立丘や、台地状の丘陵上に営まれる高位台地性の村落遺跡に分けられている。

前者の高地性集落は、小林行雄・佐原真両氏が、「紫雲出」（詫間町文化保護委員会）において、弥生中期後葉の時代を、畿内を中心として中部瀬戸内地域を包括する政治圏が確立しつつあった時代と考え、この高地遺跡を、畿内と密接な交渉を持ちながら、内海航路を監視掌握する重要な拠点と理解し、軍事的・防衛的性格をおびた集落遺跡とされている。そして軍事的性格の一つの根拠として石鏃の形態と量を指摘するのである（古代の日本 4 間壁忠彦）。播磨地方の瀬戸内海の高地性集落は兵庫県家島町男鹿島山頂（家島群島、神戸新聞社）太子町檀特山山頂に顕著な例を求めることができる。後者の高位台地性村落は「付近の地形からみてどう考えても水田を主体とした村落とは云えない遺跡で、むしろ焼畑などの原始陸耕にふさわしい場所の村落址（考古学研究22・小野忠胤）」と言われ、一方、間壁忠彦氏は「農耕生産の確立が人口増となって、分村的な集落増加として高地への集落進出となり、このような集落は、小さな谷間の低湿地を利用した水稻耕作とともに畑作をも行なった。」と主張する。

住居址の形態に関してやや深く観察すれば、発掘で検出した住居址は明らかに方形プランをしている。更に一辺の長さが3.10mであって、その長さが斜面を切断した部分のものである点を考えると、長方形住居址である可能性はまず否定的であって、ほぼ正方形に近いプランが考えられる。溝は中央部分が最も高く、両方になだらかな傾斜を示し、その度合は数センチである。柱穴は一ヶ所しか検出しえなかったが、隅にあるところをみると、復元的に考えると四本柱であったろう。以上のようなことがらを総合してわかるように弥生中期後半に方形住居址の出現を認めざるを得ない。

衆知のように播磨地方の弥生時代の住居址の推移の変遷を見ると、中期後半の遺跡で住居址の確認された姫路市名古山や加古川市池尻では両者とも円形プランを示し、後期前半の揖保郡太子町立岡（立岡・川島・石野博信・松下勝）や、同郡新宮町宮内（宮内遺跡、松本正信・加藤史郎）では隅丸方形に、播磨大申遺跡（播磨大申、島田清・多淵敏樹・上田哲也）でわかるように後期後半に至って方形が完成するというのが一般的な見方であり、特に播磨大申

遺跡の7号A・B・C住居では円形住居址の上層に方形と長方形の住居が重複しており、円形から方形への転換が後期後半に求められている。したがって今回の調査で得た方形住居址はきわめて特徴的であって、播磨地方の中期後半の住居址としては異例と言える。岡山県・津山弥生住居群の研究(近藤義郎・渋谷泰彦)には、円形住居(A・E住居)と共に方形住居(G住居)が発掘されており、東西3.84m、南北3.40mを数え、柱穴は2穴、南北のほぼ中央部分の炉址に直列してあり、周囲に細い溝がめぐり、入口に向かって流れ出しをつけている。

津山住居群で出土した土器は弥生中期後半と言われ、山田遺跡と同時期と考えられるので、中期後半に方形住居が存在することは特異ではあるが不思議なものではない。今後の調査によって、その類例は増加するだろう。

2 土 壙 群

土壙Ⅰ(第10図)

土壙ⅠはA-3・B-3グリッド(第4図)にある。第10図に示すように長さ143cm・幅42cmあり、やや不正形な長方形を呈し、一方がやや細くなっている。最も深い部分で23cm程あり、遺構の内部には地山に非常にちかい土色にやや有機質を含む土質で、微細な弥生式土器片を含む。

土壙Ⅱ(第10図)

土壙Ⅱは、B-3グリッド(第4図)で検出されたもので、全体的に細長い楕円形状を呈し、長さ131cmあり、底面は舟底状で、深さは10cmを越えない。

土壙Ⅲ(第10図)

グリッドNo.A-2・A-3、B-2・B-3の交差部分に、土壙Ⅰ・Ⅱに近接して認められる。土壙Ⅲは10~25cm程の凝灰岩の割石を内部に不整形に並べており、平行する割石積に交叉する一列の割石が並んでいる。内部に堆積する土質は土壙Ⅰ・Ⅱと同質のものであり、

平列する割石は明らかに人為的な所産であろう。掘りくぼめた部分は長さ150cm、幅は狭い部分で55cmを測り、内部の割石列の最も長い中央部分で、78cmあり、割石は地山に埋めるようにつくられている。こうした割石は、C-1の岩盤の露出部分の下方とB-2の下隅にも若干認められる。同様の類例は土壙Ⅳにも認められる。

土壙Ⅳ（第4図）

土壙Ⅳは住居址が放棄された後につくられたもので、道路工事で切断しているため、旧状を知ることはできない。残存部分は、切断部分までが163cm、切断部分での最大の長さ298cmあり、住居址の溝の部分に割石を地山にはりつけるように積みあげており、底面部分は凹凸がはげしく、内部に堆積した土質は、他の土壙と同質であるが、約140cmも掘りこまれており、土壙がつくられて、そう時間を経ずに埋めもどされたと思われ、内部の地山との色別はかなりむずかしくわずかに含まれる有機質分と土器の細片の混入だけをよりどころとした。土壙Ⅳが人為的な遺構であることは、内部の側壁に積まれた割石であって、かなり粗雑ではあるが、凝灰岩質であるところは、土壙Ⅲと共通している。

土壙Ⅴ（第11図）

土壙Ⅴは、F-0グリット部分、海拔31m20cmのライン上の斜面に直交するような形で検出された。やや不正形な方形状を呈し、長さ91cm、幅は広い方で90cm、狭い方で48cm、深さ14~16cmを測り、内部は薄黒褐色の土が堆積していたが、遺物は皆無であって、一方の隅に16×18cmのピットが認められた。土壙の上方は薄い抱合層が覆っており、土器の破片をかなり検出したので、土壙Ⅴも弥生期のものであることは確実である。

土壙Ⅵ（第12図）（集土器土壙）

土壙Ⅵは、グリッドGとHのバンクに検出した。土壙Ⅵは他の土壙と異なり楕円形状のピット（長径110cm、短径約70cm）の内部に多量の土器が出土したことである。土器は壺形土器、甕形土器、器台形土器等が雑然と混入し、完形土器は皆無であって、土器は埋没以前から破損していたらしい。今回の調査で最もまとまって土器が出土したのは、土壙Ⅵであっ

て、同時期の一形式としての一括遺物としては今後の研究の好資料となるだろう。土壌Ⅵの類例は最近比較的多く認められ、播磨地方では弥生前期から後期に至るまで、全時代を通じて確認されているが、その性格はかならずしも明確ではない。

本遺跡で検出した土壌内の土器は、土床面との間に一層が堆積しており、言わば浮いた状態で認められており、土器と土床面との間の一層（黒色有機質土）の究明こそ重要な問題点であると言えるが、この間層からは遺物は皆無であって、この遺構の性格を物語るものは何らつかみえなかった。

3 石組遺構

この調査では3ヶ所の石組遺構を確認した。そのうち石組Ⅰ、Ⅱは同類のもので共通性を認める部分が多いが、石組Ⅲは粗い方形状の石室状に配石されて、柱穴状ピットをともなったものであって、その性格は特異である。以下に石組Ⅰからその概要を順をおって記述することとする。

石組Ⅰ（第7図）

石組ⅠはB-2とC-2グリッドのバンクに出土した。地山を浅く円状に掘りくぼめ

て、やや丸味のある割石を円状に積み並べ、中央部にくぼみをつくり、底部に平かな石を並べている。鉄器は平石の上に検出したものであるが、平石と鉄器との間に1cm程の層がある。鉄器以外には遺物は認められず、特に表土との間隔も浅く、傾斜面であることなどもある。上部に盛土があったか否かも明らかでない。石組の規模は95×95cmであって、内側の



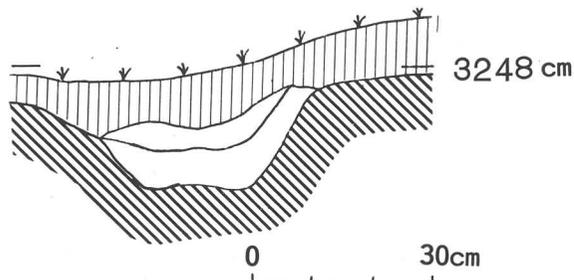
加西市 周遍寺山古墳墳頂部の火葬墓

深さは約20cm程を測る。

石組Ⅱ（第4、8図）

石組ⅡはE-0グリッド、海拔32m10cmの等高線上にあって、石組Ⅰが32m10cmと32m40cmの中間に位置することを比較すると、ほぼ同レベル上にあたることがわかる。石組Ⅱは風化した岩盤を掘ってつくられたもので、やや楕円形状を呈し、長軸171cm、短軸110cmあり、掘り込みも浅く、15cm内外である。内部には遺物は認められず、側壁に割石を並べて、不定形な楕円状の石組を形づくりに過ぎない。この場合も表土との間隔が薄いので、旧状に盛土等があったか否かは明らかにしがたく、その性格を物語るような遺物も未確認であるので、この石組が如何なる時代につくられたものであることを断じるのは困難である。

以上二つの石組について、その類似例を他の遺跡で求めると、会下山遺跡（芦屋市教育委員会・村川弘行・石野博信）のQ祭礼址石組に外観的な共通性を認める。しかし会下山遺跡の場合には、かなり豊富な遺物が検出されており、土器の他にガラス玉や特殊な男根様の土製品や砥石などもある。石組Ⅰは石組部分が比較的良好であって、形状だけから推すとむしろ加西市綱引の周遍寺山古墳（赤松啓介他）の墳頂部に追葬された三つの火葬墓に共通点があり、この火葬墓のひとつから皇朝十二銭「乾元太宝」（958年）が出土しており、時代の上限を明示するものであって、山田遺跡の周辺では姫路市・書写の養老院建設にともなう前方後円墳の後円部竪穴式石室の上部にも同様の石組（姫路市教育委員会・上田哲也）が認められ、内部から灰を検出した。周遍寺山古墳・書写養老院古墳はいずれも古墳時代中期のものであって



挿図2 溝状遺構 No.1

その上限は山田遺跡の場合のように弥生にまでさかのぼらない。

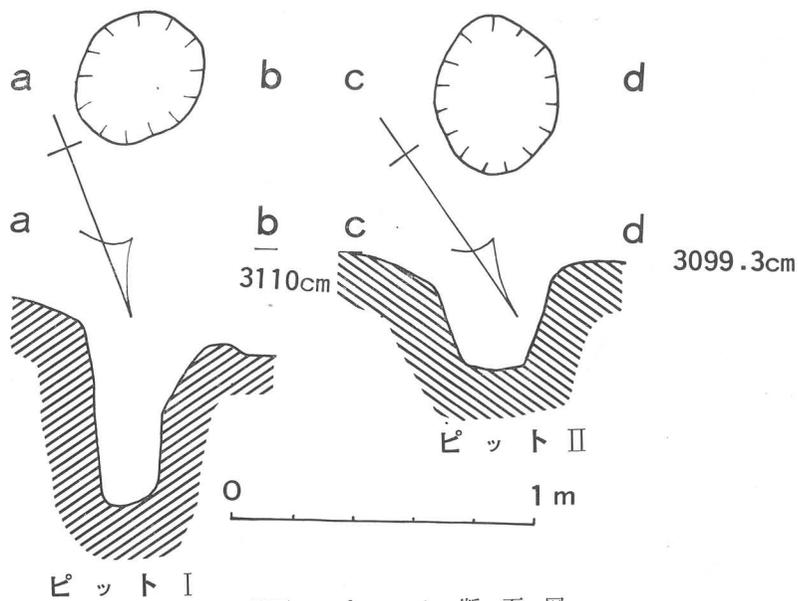
以上のようなことから考えて、山田遺跡の石組は、会下山遺跡で言う祭礼址と考えるよりも、平安以降の火葬墓と考えることの方が適当であろうかと考える。即ち、石組Ⅰで検出した鉄器が、弥生時代の鉄器に類例をみないし、鉄器そのものに比較的新らしい様相が感じられるし、石組の構造そのものに周遍寺山古墳の火葬墓に共通点が多いことなどである。

石組Ⅲ（第4、9図）

石組Ⅲは第4図に示すグリッドF-0に第2次調査で確認した。住居址の西方にのびる地山を切断する小径の追跡中に検出したもので、2ヶ所の柱穴にはさまれるように割石を長方形に並べたものである。第9図にその実測図を示した。石組の一部分の割石は抜かれているが、地山に抜形が明確に認められ、約10ヶの割石で、長軸96cm、短軸50cmで斜面側の地山の一部を掘りくぼめている。平面上では方形に囲まれたような割石も立体的にはややバランスを欠き、粗雑な感じである。ピットⅠ・Ⅱ（挿図3）の間隔は3m57cmあって、いずれも地山を深く掘りこんでつくられたものであり、ピットⅠは直径45×42cm、深さ63cm、ピットⅡは23×20cm、深さ30cmを測る。ピットには内側上部に割石がつかまっていて、柱が立っていたことを間接的に示している。石組Ⅲには高杯形土器第18図(51)が1ヶ体破片で出土し、埋没以前から破壊されていたもので、高杯は皿部口縁端を下方に折りかえすものであり、器面の整形は入念に研磨されたものである。ピットⅠ、Ⅱ以外には柱穴は検出されず、上方は比較的急な斜面が続いているので、上方にピットがあるとは予想しがたく、ピットはこれ2ヶか、または西方に連続していた可能性もあるけれど、工事のために今となっては確認することは不可能である。

4 溝 状 遺 構

C-2、C-3に3本の溝を検出した。この3本の溝は斜面に平行してC-2グリッド部分から順次上段へそれぞれ、溝Ⅰ、溝Ⅱ、溝Ⅲと称することにする。



挿図3 ピット断面図

溝Ⅰは3本のうちで最も幅の広いものであって、深さは5cm内外、底の部分は丸味を帯びている。長さ2.76cm、幅は広い所で40cmあり、西北端は丸味をもって止められ、東南は自然消滅している。溝Ⅰの上方170cmを離して溝Ⅱが平行する。溝Ⅱは比較的幅が狭く10cm内外で、全長517cmあり、やや蛇行気味ながらも、ほとんど直線に近く、両端ともに意図的に止まっている。

溝Ⅲは溝Ⅱから約148cmを離れて平行している。溝Ⅲは概略5区分され、全体で503cmあり、4ヶ所の途切れた部分がある。この溝の上方はかなり急傾斜をして、ほとんど地山が露出している。

この3本の溝は土くずれを防ぐためと云うよりも、下方への雨水の流入を防ぐための施設と思われ、内部は砂味を帯びた粘土が、いずれも堆積していたが、遺物はまったく出土せず、時代を知ることができなかった。

(上 田)

5 出土遺物

1 弥生式土器

弥生式土器は大別してA—2グリッド・住居址・G、Hグリッドの土壇Ⅵの3つの地点から出土した。ここでは遺構別に土器をとりあつかわず、同一時期と考えられるので、一括して土器について述べる。土器の出土地点は図下に明記する。

1)土器 (第13図～第18図)

(A)壺形土器 (第13図1～第16図23)

壺形土器は9種類に区別することが可能である。口縁端面がやや内外に拡張するものを壺形土器Aとし、口縁端面に凹線文をめぐらすものをA₁、波状文をめぐらすものをA₂、無文のものをA₃とする。

壺形土器A₁ (1.2.3.4.5.6.16、写真10—3)

(1)は5条の擬凹線文状の凹線文をめぐらす。外面は頸部から胴部肩にかけて刷毛目仕上げ、胴部下半は篋で縦にけずるようにして磨く、部分的に刷毛目がみられる。内面は、口縁と胴部の接合部に指頭圧痕がみられ、輪づみの痕もみられる。内面全体に荒い刷毛による調整がみられる。高さは41cm、口径23cm、胴部が球形に張った土器である。(2)は口縁内面を刷毛整形する。(4)は口縁内面を縦に刷毛で整形し、その上から篋の横磨きがみられる。外面頸部に篋による浅い圧痕がみられる。(5)は1条の擬凹線文をめぐらす、外面は刷毛によるヨコナデ仕上げ、(16)は3条の凹線文をめぐらし、6条の凹線を縦に施す。部分的に刷毛調整がみられる。

壺形土器A₂ (7.8.9.10)

口縁端面に4～5条の櫛描きによる浅い波状文をめぐらす。(7)は頸部外面に縦に刷毛目が

みられるが、下部が破損しているので明確なことはわからない。(8)(10)は頸部内面を、(9)は外面を刷毛でヨコナデ整形をする。

壺形土器 A₃ (17、写真10—5)

口縁端面は無文、頸部外面下端に篋による刺突列点文や篋調整がみられる。内面は刷毛による調整の上に荒い篋仕上げをおこなっている。

壺形土器 B (11.12)

頸部は短く直立し、水平に近く外反したものをいう。(11)は頸部外面を右上から左下へ刷毛仕上げする。(12)は内面を刷毛調整する。この種の土器は、加古川市池尻平山遺跡(5) (註1)をはじめ、奈良一町、大阪船橋 (219~228) (註2)、唐古(7)の (229.230) (註3)、など畿内に通常みられる器種であるが、播磨では播磨権現遺跡第1類土器 (10.14) (註4)にみられるなど、後期的要素の強い土器と考えられる。

壺形土器 C (13)

口縁部が上端に向って外反するあまり類例をみない器形である。細頸壺の範疇にはいるものであろうか。類似の土器が北竜野遺跡 (註5) に2点みられる。

壺形土器 D (14)

口頸部に5条の凹線文をめぐらす。胎土も仕上げもよく黒灰色である。小片のため不明であるが、水差形土器か細頸壺形土器の口頸部と思われる。川島遺跡 (註6)、伯母野山遺跡 (註7)、田能遺跡 (註8) 等にみられ畿内の要素の強い器種といえる。

壺形土器 E (15、写真10—4)

口縁にあとから粘土紐を貼りつけて下端を拡張したものである。その際の指頭圧痕が残る。頸部外面に刷毛目が部分的にみられるが、器面が剝落しているので全体に施されていたかどうかは不明である。胴上部は篋による調整をする。内面の頸部と胴部に接合の痕がみられ、刷毛による荒い調整がみられるが、充分調整されていない。胎土も悪く粗悪品である。

(18—A. B、写真10—6)は頸部に篋による刻目文をめぐらし、縦に刷毛整形する。土壌VI

から出土した土器で、胎土から同一個体であるが、胴部分がなく復元できなかった。頸部の仕上げ手法から、中部瀬戸内の要素の強い土器である。図の頸部は上下が逆のようである。

無頸壺形土器 (19.20.21、写真10—1・2)

(19)は口縁と胴部の肩に、篋による刺突列点文がめぐらされている。内面に輪づみの痕が底部に2条、頸部と胴部との接合痕がみられる。今のところ類似のものはみられない。高さは20cm、口径は10cmである。(20)は台付無形壺A(註9)に属するものであろう。加古川市平山遺跡(6)、川島遺跡土壙7(24)、伯母野山遺跡(第25図)に類似のものがみられる。(21)は伯母野山遺跡(76.78)以外あまり報告例をみない器種である。これらの壺には通常口縁部に接して、2孔1対の紐孔を穿つが、この3点にはみられない。

把手付深鉢形土器(23)

把手は失われているが、両肩に把手の痕跡は明瞭に残る。図の把手は、残存部と把手(24.25、写真14—左上)を参考に復元したものである。把手は壺に貼りつけただけでは機能を有し得なかったのだろう。上方は器面を穿って把手を付け、その上から粘土で貼りつけている。下方は痕跡が不明である。類例のものとして唐古南方部(253)(註10)がある。高さ22.5cm、口径14cmである。把手付の土器は播磨では、加古川東溝住居址4(註11)、加古川市平山遺跡(註26)、新宮町宮内遺跡(註12)から出土したものを合わせて4例である。

手づくね土器(22)

この種の土器は、弥生後期以後の各遺跡から出土し確認されているが(註13)、中期後半の名古山遺跡住居址内からも出土している。(註25)㉒は住居内床面から出土したが、用途については不明である。

(26.27、写真14—右上)は器形不明の土器片であるが、変わった土器なので特記する。胎土から同一個体のものようであるが復元はできない。竹管文と沈線文がみられる。

(B) 甕形土器(第16図28～37)

甕形土器は、3種類に区分する。

甕形土器 A (28.29.33.34.36.37、写真11—7.8)

(28.29)は共に外面全体を刷毛目で仕上げる。(28)は胴が強くはる。(29)は強くはらず、胴部内面上部を横に、下半部は縦に篋けずりし、器壁の厚さを薄くする手法がみられる。口縁端面は無文、底は平底である。(33.34.36.37)は川島遺跡土壙20.21、播磨極田遺跡(註14)等で普通にみられる器種である。

甕形土器 B (30.31.32)

口縁端面に凹線文をめぐらすものである。

甕形土器 C (35、写真11—9)

口縁部が「く」の字形に外反する甕である。口縁外面にヨコナデがみられ、胴部は刷毛目仕上げである。この種の甕は田能遺跡(288)、伯母野山遺跡(87)でみられるくらいであまりみられないが、播磨弥生後期の甕の中に時々見られる器種のようなものである。

(C) 土器底部(第17図38~48、写真13(上))

これらの底部は、壺か甕か詳細は不明なので一括して図示する。(38.40.42)は壺と思われる。(42)は外面を、(45)は外面を荒い篋磨き、内面は篋けずり仕上げをする。川島遺跡土壙10(82)、土壙21(11)、22溝(146)に同じ手法をみる。(38.40.46.47.48)は外面を、(39.44)は内面を刷毛で調整するが、(47.48)は小丸山側の高地性住居址を踏査中、破壊された住居から転落していたものを採集したものである。

(D) 高杯形土器(第18図 49~53)

高杯形土器は2種類に区分する。

高杯形土器 A (49.50)

水平にひろげた口縁部をもち、その内端に1条の凸帯をめぐらした高杯である。(口縁部外端面はほとんど垂下しない高杯B₂(註15)に属するものと考えられる。)この種の高杯は、播磨地方では会下山遺跡(註16)、伯母野山遺跡、播磨大中遺跡41号住居(註17)、川島遺跡、播磨極田遺跡、播磨橋詰北遺跡(註18)など、播磨地方には普通に存在する器種であるが、

高杯 B₂ のものは摂津加茂遺跡（註19）、紫雲出遺跡（註20）、川島遺跡、播磨八幡遺跡（註24）にしかみられない。

高杯形土器 B（51.52.53）

口縁がなだらかなカーブをえがいてたちあがるものと腰に稜をもつものがある。たちあがりに凹線文をめぐるしている。(51)は石組遺構Ⅲから出土したものであるが、いずれも篋磨きによる入念な仕上げとなっている。「円板充填法」手法を使う。(53)は加古川池尻平山遺跡の(11)と類似する。(51.53)は畿内の、(52)はたちあがり強く、中部瀬戸内の要素の強い器種である。

(E) 高杯脚部（第18図54～61、写真12—12.13）

(54.55)にはしぼりめがみられ、(56)は外面を篋磨きする。(55.57)は柱状部に10数条の凹線文をめぐる。山陰、山陽的要素（註21）の強い器種である。脚部いずれも下端が立ちあがるものである。(58.61)はヨコナデによる凹部がめぐっている。(58)は円孔を十数個あけている。いずれも外面は篋磨き仕上げ。

(F) 器台形土器（第18図62～64、写真12—10.11）

(62)は中央部が狭く、上縁、下縁がひらいた円筒形の土器である。胴部内面の仕上げは荒く、しぼりめがみられる。外面は篋磨きで整形する。胴部くびれは強く上東遺跡（註22）の仕上げ手法に類似する。体部に14個の円孔を穿つが、回転させながら穿ったらしく、円孔は徐々に左下がりになっている。脚下端に6ヶ所3条の篋圧痕文を施す。高さ14.5cm、口径13—16cmの小型のものである。(63)は脚端部や胴部に凹線文をめぐる。残存部から大きな円形の透孔を4個穿つと考えられる。外面はナデ整形を施す。

なお山田遺跡の土器については他に『姫路丁古墳群』（註23）に報告例がある。（中 溝）

（註1）上田哲也、河原隆彦『播磨の弥生文化』東洋大学付属姫路高等学校考古学教室 昭和41年

- (註2) 佐原 真 「畿内地方」『弥生式土器集成本編2』P1.47 昭和41年
- (註3) 小林行雄、杉原荘介「唐古(7)」『弥生式土器集成資料編』P1.40 昭和33年
- (註4) 松下 勝『播磨権現遺跡』兵庫県教育委員会 昭和47年
- (註5) 加藤史郎『竜野市北竜野弥生遺跡』竜野実業高等学校生徒会考古学部 昭和41年
- (註6) 櫃本誠一『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会 昭和46年
- (註7) 若林泰、齊藤英二『伯母野山弥生遺跡』神戸市文化財調査報告第6冊 昭和38年
- (註8) 尼崎市田能遺跡発掘調査会編『田能遺跡概報』兵庫県社会文化協会 昭和42年
- (註9) (註2)に同じ
- (註10) (註3)に同じ
- (註11) 松下勝、石野博信『播磨東溝弥生遺跡Ⅱ』加古川市教育委員会 昭和44年
- (註12) 神戸新聞 昭和48年3月30日
- (註13) 上田哲也、中溝康則『播磨の土師器の研究』東洋大学附属姫路高等学校第3冊 昭和48年
- (註14) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』第15巻第4号 昭和44年
- (註15) (註2)に同じ
- (註16) 村川行弘、石野博信『会下山遺跡』芦屋市教育委員会 昭和39年
- (註17) 上田哲也「播磨大中遺跡調査略報」兵庫県埋蔵文化財調査集報第1集 昭和46年
- (註18) (註14)に同じ
- (註19) 末永雅雄、石野博信他『撰津加茂』関西大学文学部考古学研究第3冊 昭和42年
- (註20) 小林行雄、佐原真『紫雲出』詫間町文化財保護委員会 昭和39年
- (註21) (註2)に同じ「山陽地方(1)」「山陰地方Ⅱ(2)」「北四国地方(2)」
瀬戸谷皓「豊岡市九日市女代神社遺跡発掘調査報告」兵庫県埋蔵文化財調査集報第2集 昭和49年
磯崎正彦『兵庫県太子町常全遺跡調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第4冊 昭和46年
- (註22) (註3)に同じ「岡山上東(2)」 P1.8
- (註23) 上田哲也『姫路丁古墳群』東洋大学附属姫路高等学校 昭和41年
- (註24) 阿久津久『播磨八幡遺跡』八幡遺跡調査会 昭和49年
- (註25) 上田哲也氏による
- (註26) 未報告、加古川市教育委員会 収蔵

山田遺跡の土器の特徴

①器種は多様であり、後期にはあまりみられない把手がある。②凹線文はみられるものの、川島遺跡中期5(註1)に比して著しい退化現象を示し、全体として無文化の傾向が強い。③後期の土器内面にみられる「輪づみ」の痕、粘土紐の継ぎ目がよく認められる。④壺形土器の場

合、口縁端面を凹線文で飾るもの7点、楕描波状文で飾るもの4点、無文のもの4点であるが、波状文で飾るものが、比較的多いように感じられる。残存する頸部には、凹線文は認められない。胴部は無文化が著しく、窰による圧痕文（刺突文）が主体を占める。しかし写真13(中)のように、楕描直線文・波状文も若干みられる。⑤甕形土器は、口縁端面に凹線文を施文するものは少ない。外面全体に刷毛仕上げ、内面窰けずり手法がみられ、畿内の仕上げ手法とは相違し、中部瀬戸内の手法で仕上げられている。しかし、畿内・中部瀬戸内とも、外面下半は窰仕上げするのが通常であり、外面全体の刷毛仕上げは、あまり類例をみない仕上げである（註2）。⑥高環形土器Bは、川島遺跡でみられたような数条の凹線文は姿を消し、わずかに1・2条をみるにすぎなくなる。器形は畿内の要素が強い。所謂畿内周辺に分布する高環B₂も存在する。⑦脚部は、下端の立ちあがるものがほとんどである。⑧叩目はみられず、部分的に幅の狭いヨコナデ調整がみられる。

以上と同じような特徴を示す土器を出土する遺跡として、姫路橋詰北遺跡（註3）、名古屋山遺跡（註4）、加古川平山遺跡（註5）が考えられる。

昭和44年山陽新幹線敷地内から発掘された川島遺跡の土器が、『中期4・5に位置し、播磨的、中部瀬戸内の要素の強い土器であった。』（註6）のに対し、山田遺跡の土器は、全体として無文化の傾向が著しく、中部瀬戸内の要素はみられるものの、後期を待たずして畿内の要素の強い土器へと変化しているようである。

播磨の中期弥生式土器の動態

播磨における弥生式土器の動態は、すでに今里幾次氏の「播磨弥生式土器の動態」（註7）によって編年されているが、その後、山陽新幹線、加古川バイパス等の工事に付随しておこなわれた学術調査によって明らかとなってきた川島遺跡、東溝弥生遺跡Ⅰ・Ⅱ（註8）等の資料をもとにして、川島遺跡からわずかに2.4kmしか離れていない山田遺跡が、中期のどの

時期に位置するのかを壺の文様の変遷を中心に観察し、考えてみた。なお山田遺跡は、古くからその所在が知られ、多くの遺物が表面採集されている。

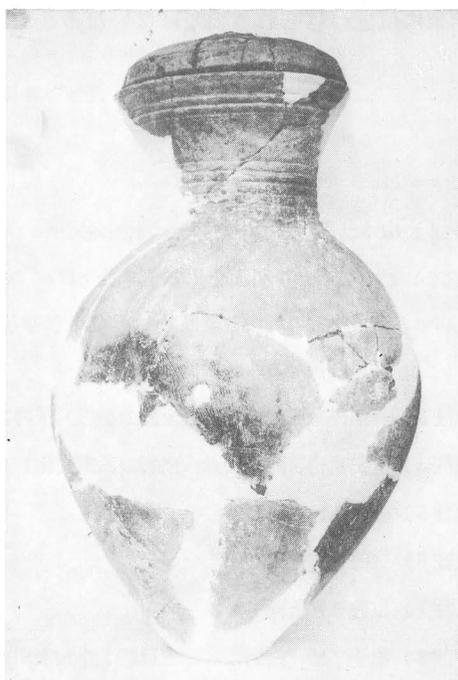
第Ⅲ様式(古) 兵庫県西南部の壺の特徴は、口縁部が斜め下に外彎し、口縁部内面に凸帯をめぐらすものがほとんどであり、他の装飾は少ない。口縁端面は無文のものもあるが、篋描による斜線文・綾杉文、櫛描による波状文を施文し、その上に円形浮文の貼付が盛んである。頸部は下端に凸帯をめぐらす。凸帯には指頭圧痕文と、断面三角形のもの2種類あるが、断面三角形凸帯をめぐらすものが殆んどで、その上に縦に棒状浮文を加えている。(初期においては、断面三角形凸帯を貼付ける壺と、指頭圧痕文凸帯を貼付ける壺とは器種が違っていたようである。)胴部の加飾は、櫛描による直線文・波状文、篋描による斜格子文等の組み合わせで、文様上に円形浮文を貼付けたものが多い。整形は外面において頸部は縦に刷毛、胴部は下地に刷毛を用いて文様を描き、それより下を篋磨きし、内面は刷毛を用いて整形するのが通常であることが指摘されている。(註9)

第Ⅲ様式(新) 壺の口縁部は、更に大きく斜め下に外彎する。口縁部内面は(古)に続いて凸帯で飾ることを常としているが、口縁部端面にはすべて幅の狭い凹線文を多用し、凹線文上に篋描斜線文、棒状浮文・円形浮文を加飾するのが通常である。頸部は断面三角形凸帯か、指頭圧痕文凸帯かどちらかで飾るが、両凸帯で2重に飾るものがみられだす。胴部文様は、(古)と同様櫛描直線文・波状文、篋描斜格子文、棒状浮文、円形浮文で加飾するが、新たに篋圧痕文、貝殻圧痕文が登場する。この文様は、中部瀬戸内地方に特有な方法である。(註10)この時期の遺跡と考えられるものに播磨国分寺台地遺跡(註11)、川島遺跡中期4(註12)等がある。

凹線文は第Ⅲ様式(新)からみられるが、第Ⅲ様式と第Ⅳ様式を区別する基準は、頸部文様(断面三角形凸帯から凹線文に)の変遷を根拠として扱った。(註13)

第Ⅳ様式(古) 大きく外彎する口縁、口縁端面の幅の狭い凹線文、凹線文上の棒状浮文・円形浮文の加飾、頸部の指頭圧痕文凸帯は、第Ⅲ様式(新)と同様であるが、口縁内面の凸

帯は、1条になり、内面加飾が割合多くみられるようになり、頸部の断面三角形凸帯は、凹線文に変わるといふ変化がおこる。胴部においては、楕描文で飾るものが少なくなり、篋圧痕文、貝殻圧痕文で胴部中央を飾る土器がみられはじめるが、第Ⅲ様式（新）の土器と外見上は類似する。播磨ではこのころから、東古浜裏山遺跡（註14）、飾西東山遺跡（註15）、北竜野遺跡（註16）、檀特山遺跡（註17）のように高地性集落への移動がみられはじめるようである。



竜野市内山出土の壺棺

第Ⅳ様式（中） 播磨中期の壺の特徴であった著しく外彎した口縁はみられなくなり、口縁端面は上下に拡張したものとなり、加飾は減り、凹線文に混って無文、波状文がみられるようになる。凹線文上には、依然として円形浮文はみられるが、棒状浮文は姿を消していく。口縁部内面の凸帯は姿を消し、頸部の指頭圧痕文凸帯も姿を消す。しかし頸部には、退化した数条の凹線文が残る。胴部文様は無文化へと傾向を強め、篋圧痕文、貝殻圧痕文のみで飾る土器が圧倒的になる。楕描直線文・波状文は、若干残る。この時期の遺跡と考えられるものに、極田遺跡（註18）、富士才遺跡（註19）、東溝遺跡Ⅱ住居址3・4（註20）、新宮宮内遺跡（註21）等がある。

第Ⅳ様式（新） 口縁部は水平にちかく外反したものとなり、口縁端面の上下拡張は少なくなり、口縁端面の凹線文も退化現象を示した。円形浮文も加飾されることはまれになる。頸部に残存していた凹線文も姿を消し、胴部文様は、いっそう無文化が著しく、篋圧痕文が主流となり、貝殻圧痕文は姿を消す。わずかに楕描波状文は残る。この時期と考えられる遺跡に、姫路橋詰北遺跡（註22）、名古屋山遺跡（註23）、加古川平山遺跡（註24）新宮町天神山遺跡（註25）などがあるが、上記の「山田遺跡の土器の特徴」からみて山田遺跡は、中

期末に位置づけられるのではないだろうか。

(中 溝)

(註1) 山本三郎「播磨中期弥生式土器の実態」『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会 昭和46年

(註2) このころより外面全体の刷毛仕上げがみられるようである。鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」弥生式土器集成本編の岡山上東に小林行雄、杉原荘介「唐古(10)」「大阪西ノ辻Ⅰ地点」弥生式土器集成資料編に類例がみられる。

(註3) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』第15巻第4号 昭和44年

(註4) 上田哲也、河原隆彦『播磨の弥生文化』東洋大学附属姫路高等学校考古学教室 昭和41年

(註5) (註4)と同じ

(註6) (註1)と同じ

(註7) (註3)と同じ

(註8) 松下 勝『播磨東溝弥生遺跡Ⅰ』加古川市教育委員会 昭和43年

松下 勝、石野博信『播磨東溝弥生遺跡Ⅱ』加古川市教育委員会 昭和44年

(註9) (註8)と同じ

(註10) (註3)と同じ

(註11) (註3)と同じ

(註12) (註1)と同じ

(註13) (註1) (註3)と同じ

(註14) 中浜哲朗「東古浜裏山遺跡」『姫路古代誌』No.7 姫路古代文化研究会 昭和35年

(註15) (註3)と同じ

(註16) 加藤史郎『竜野市北竜野弥生遺跡』竜野実業高等学校生徒会考古学部 昭和41年

(註17) 松下 勝「檀特山遺跡確認調査報告」『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会 昭和46年

(註18) (註3)と同じ

(註19) (註3)と同じ

(註20) (註8)と同じ

(註21) 是川長、加藤史郎、松本正信『新宮宮内遺跡発掘調査報告』新宮町教育委員会 昭和41年

(註22) (註3)と同じ

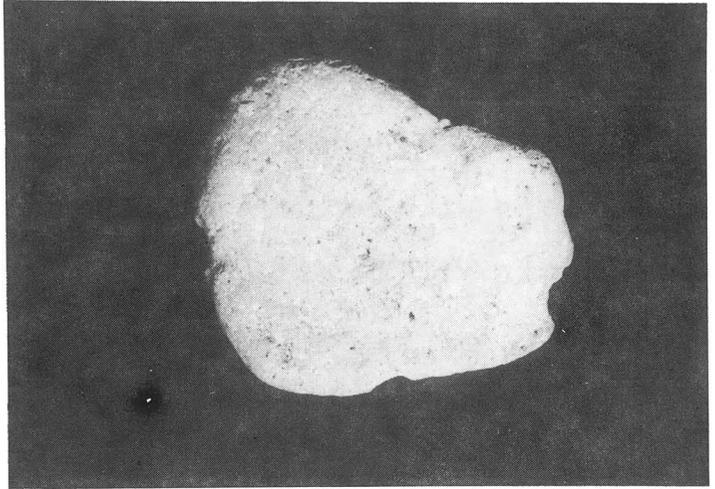
(註23) (註4)と同じ

(註24) (註4)と同じ

(註25) 県立西播教育センター敷地内、昭和47年夏ツボ掘調査、住居址2を確認、未報告

2 石 器

山田遺跡の発見と紹介の端緒となったのは石器であり、現在も丘陵上や耕地にサヌカイト片や石器の採集が可能であり、写真に示すような磨製石斧（P15）も採集されて



B - 3 出 土 の 石 錘

いる。この遺跡の主要な時期が弥生時代中期を中心とする時期であることを考えると当然であって、今後も更に資料の数は増加するだろう。

石 鋸

今回の調査はサヌカイトの石鋸1本とサヌカイト片少量である。石鋸は比較的小形のもので、恐らく凸基有基式であったろう。一応両面からつくりあげているが、やや粗製である。使用されたものだろうか先端が欠損している。長さ2.65cm、幅1.55cm、厚さ5mmを測る。

石 錘（第19図—65.66）

比較的小さい自然石の両面(65)、または四方をうち欠いて、脱落を防ぐ細工をしたものである。(65)は7.4×7.1cm、(66)が9.2×7.6cm、厚さ1.1cm、1.4cmの扁平形を呈し、表面はなめらかである。弥生中期後半の石錘は加古川市池尻平山遺跡（播磨弥生文化の研究・東洋大学附属姫路高校）で出土しているが、球状または楕円形状の自然石に縦または横に線状に凹部をうちかいてつくられたものがあり、山田遺跡の南方瀬戸内に浮ぶ家島群島大山遺跡（家島神戸新聞社、武藤誠・石野博信）、会下山遺跡（芦屋市教育委員会、村川行弘、石野

博信) や神戸市伯母野山弥生遺跡(若林泰、斉藤英二)、紫雲出(詫間町文化財保護委員会・小林行雄、佐原真)等の高地性遺跡で出土している石錘も同類のものであって、山田遺跡出土の、この石錘は弥生中期後半の石錘としてはあまり類例をみないものである。この石錘に類似性を求めるとすれば、縄文時代のものに求められるが、岡山県彦崎貝塚(池葉須藤樹)、同里木貝塚(倉敷考古館研究集執第7号)、紀伊有田地ノ島遺跡(有田市教育委員会・綱干善教)で認められ、附近では姫路市辻井遺跡(今里幾次)にも出土が報告されている。しかし縄文期の『石錘は漁具として使用され、扁平な丸味のある自然石の両端を打ち欠いている』ものが大部分であって、山田遺跡第19図66のように四面を打ち欠いている類例は認められない。弥生中期の石錘は上記のように楕円球状の石に、多くの場合は縦に縄かけ溝を精巧に一周させ、自然石をそのままもちいたものもあるが、円礫をもちい、さらにととのった楕円体にしあげたものが多く礫の短軸にそい面を切ってめぐらす場合は非常に少ない。この形式の石錘は中部瀬戸内に面する遺跡に主として認められるものらしく、播磨地方では上記加古川池尻平山遺跡と家島大山遺跡がある。

以上のことから考えると山田遺跡出土の石錘は特異な例とみなすことができ、一時的、臨時的な粗製石錘であって、本格的な漁具とは言いがたく、山田遺跡の弥生人の漁獲姿勢を物語るものと言えよう。

3 鉄 器

鉄 釘(写真15(下)、第19図の68.69)

鉄釘は石組1の内側、割石の上部かで検出したものである。表面から15cm、表土下約5cmのところであって、石組1との関係が問題となるもので、石組1に時代を示す遺物が皆無であり、鉄釘もやや浮いたかたちで検出され、表面との間も非常に近く、表土が落葉の腐蝕土であることなどから、積極的に弥生期の遺物と断言しがたい。したがって今後の類例のため

に記録にとめおくことも必要と考えて、記述することとする。

(68)は長さ5.9cm、頂頭部があり、中央部は方形を呈し、ふとさ3mm、先端は鋭く尖る。酸化は著しいが旧状をよくとどめている。

(69)は頂部に略円形状の薄い円盤が付き、断面方形の頸部に、断面が円形の半円状で先端が鋭く尖る鉄製品である。全体の大きさは約10cm、半円状の部分の直径は68mmを測る。旧状は頸部に柄を付けて使用されたものと推察される。

鉄 斧 (写真15の上)、第19図の70)

この鉄斧は発掘によって出土したものでなく、第2図のグリット配置の上方49.8m地点の平端部をブルドーザーによって削られた部分に円礫が散乱し、礫に朱が付着し箱式石棺の石材と思われるものが認められた。鉄斧は円礫部分で採集したもので、古墳時代のものだろう。鉄板の両端を折りまげて、木部を挿入するもので、刃部の広さ56mm、厚さ2mmの比較的薄手のものである。

(上 田)

6 むすびにかえて

以上節を分けて、山田遺跡の発掘調査で得た成果を記述してきたが、ここで改めてまとめを試み結びにかえたい。

土器 先ず出土遺物から考えてみることにする。出土遺物で、最初にあげねばならないのは土器である。ここで得た土器は、住居址及び住居址付近の包含層及び土壌で出土したものであって、住居址を含めて、包含層の堆積層はきわめて薄く、ごく短期間に埋没したものである。この層から検出した土器は、かかる意味から考えて短期間に使用された一様式を示すものと考えられる。土器の文様の特色の一つに櫛目文と凹線文があげられ、櫛目文は、細くシャープな文様が特徴で、文様構成は波状文、斜格子、刺圧列点文、平行線文等が認められ、凹線文は器台、高杯の脚部、壺の口縁及び頸の一部に認められ、特に器台の台部に施文された文様は特徴的である。櫛目文に凹線文が加わると畿内の土器形式では唐古第四様式の範疇に入るべきものであるが、器面は篋で丹念に研磨し、部分的に刷毛目仕上げを行ない、畿内第四様式にみられる「たたき目」の手法は認めない。土器の底部も入念に平底に研磨されて、大部分が水平である。

器形では壺、甕、器台、高杯の他に突手付の壺が認められるが、それらは縦突手と横突手とがあって、突手そのものも断面が円形と方形のものがあり、円形の場合は横付、方形のものは縦付が多いようである。なおこの時期には鉢形土器は少量らしく、今回の調査で得ることはできなかった。

唐古第四様式の影響はかなり濃厚であって、畿内の土器と共通性が強く、畿内の文化圏にあったことをものがたっている。

石器 石鏃と石錘が出土した。石鏃は粗品1本であるが、石錘は2ケを検出した。既にその概要については出土遺物の項で記したが、石錘の形が非常に古い様相を示していること

と、魚撈が生活の一部を形成していることを物語っており、漁場をどこに求めるべきかは想像しか行なえないとしても、遺跡の西方には大津茂川、東方には夢前川が、それぞれ2 km程の地点を流れているので、恐らく淡水魚捕獲のための魚具と考えることが妥当と思われる。

石鏃はずかに1本のみであって、付近にはサヌカイトの細片が散布すると言えども、住居址を中心とした今回の調査ではサヌカイト片すら少量であって、これだけをもって、多くを論じることはむづかしい。ただ山田遺跡と同時期の姫路市名古屋山住居址では、十字形で磨製石鏃の他凸基有茎式、凹基無茎式石鏃等もかなり多く出土しているので、山田遺跡の場合も、住居址が完全に保存されていれば、豊富な量を得られた可能性もある。

住居址 所謂方形住居であって、西南に斜面を切断して小径(Path)を伴うもので、特に方形平面を持つ中期後半の住居址の例はまれである。もっとも前期前半の板付遺跡、愛知県西志賀貝塚などにも認められて、弥生時代の初期から存在していた(考古学講座4・小野忠熾)が中期以後の住居址の大部分が円形住居であることは確実であって、岡山県沼遺跡の例に、播磨地方の中期の住居址では本例が唯一である。住居址の総数は第1図に示すように、本遺跡では12戸を数えるが、工事にともなって発見されたもので、特に北尾根上の7戸は尾根を切断して露出するもので、いずれも複合していないし、住居内の堆積土層から観察しても、床面の状況、堆積した包含層の状態から判断しても、住居はそうながく使用されていないし、住居の放棄後に新たに住居址を利用して生活の継続も行なっていないようである。平地と違って住居地選定の条件には制約が多いことなどを考えあわせると、ごく短期間の遺跡であると言えよう。即ち、中期の後半の一時期にこの地に移住して、後期には、またこの地から離れていたと考えられるのである。

土壙 は合計6ヶ所やや不明瞭なもの1ヶ所(A-2とB-2のバンク)が発掘された。それらは円形で土器を伴うもの(第VI土壙)、方形または楕円形のもの(第V土壙、第I・第II土壙)楕円形状で割石を並べたもの(第III・IV土壙及びA-2・B-2バンク)の3種

類に分類することが可能である。このうち遺物をともなうものは、第Ⅵ土壙だけであって、他の土壙からは土器は言うに及ばず何ら副葬品らしきものも検出しなかったので、これらの遺構の性格を推し測ることは不可能である。ただ規模が小さいけれども、舟底状土壙に類するものと考えられ、土壙墓の可能性もあり、割石を施設するものは、更に丁寧な埋葬方法をもちいたと考えることもできる。

石組遺構 は合計3ヶ所で検出されたが、石組Ⅰ・Ⅱは恐らく平安期の火葬墓の可能性が強い。石組Ⅲは弥生時代中期後半のものであって、2本の柱穴とともに宗教的な意味あいをもった遺構であって、それが埋葬用のものか、祭祀的な意味をもつかは別にしても、高杯を使用していることはきわめて注目される遺構であって、今後の究明を待たねばならないが、当時の生活の一端を理解するうえで重要なものであり、その一資料となるだろう。

山田遺跡は何回も記すように盆地状を呈する谷間の尾根上や斜面に生活の場を求めたものである。そして山を越せば、いずれの地においても天津茂川や夢前川によって堆積した地味豊かな水田地帯が開けているのである。住居下方の盆地内の土地は、工事によるボーリングによっても、砂礫層と酸化鉄を濃く含む層が広がり、水稻栽培に不適当な土地である。

前述のように山田遺跡は、弥生期に限って観察すれば、弥生中期後半の一時期だけに限られるものである。かかる状況から考えてみても、私は畑作や陸稲栽培のために、この地を選らんで定住したとは考えられず、山田遺跡をとりまく政治的、軍事的要因を第一としたい。

小林行雄、佐原真両氏が「紫雲出」において、弥生中期後半を、地域集団が、征服・連合というかたちで、より大きな政治的単位に統合されてゆく過程で、対立・抗争の焦点となったのが畿内であって、中部瀬戸内は、おくれて、その抗争の渦中にまきこまれた地域と推論し、その論拠に石鏃の大型化、多量化をあげている。かかる意味づけからすれば、山田遺跡と西南方の平野部中央に高く立つ檀特山山上の遺跡とは有機的な関連が考えられ、檀特山の前方に広がる瀬戸内海の家島群島・男鹿島とは相対するものであって、檀特山山頂の遺跡は烽台的・見張台的性格をもち、山田遺跡はこうした緊迫した政治状勢のなかで、食糧生産地

から離れて、軍事的により安全な防禦の意味から移住したものと考えられる。

最近の調査例では、山陽団地用木山遺跡(岡山県埋蔵文化財報告3・神原英明、則武忠直)では用木山標高(92m)から愛宕山(標高67m)にかけての尾根上及び南斜面に、合計12戸の住居址が発掘され、第1地点に4家、うち円形3、方形1戸、第2地点でも同様、第3地点では円形2戸、方形2戸の住居がそれぞれ単位集団を形成している。時期は弥生時代中期後半から終末期の限られた時期のものと言う。ここでは4家の方形住居が確認されており、女男岩遺跡(倉敷考古館研究集報10号、間壁忠彦、間壁葎子)に、王墓山丘陵の標高30mばかりの東から西にのびた山尾根上の斜面に隅丸方形住居で、柱穴4ヶ所がそれぞれ四隅に認められ、土器から弥生中期末のものと言う。

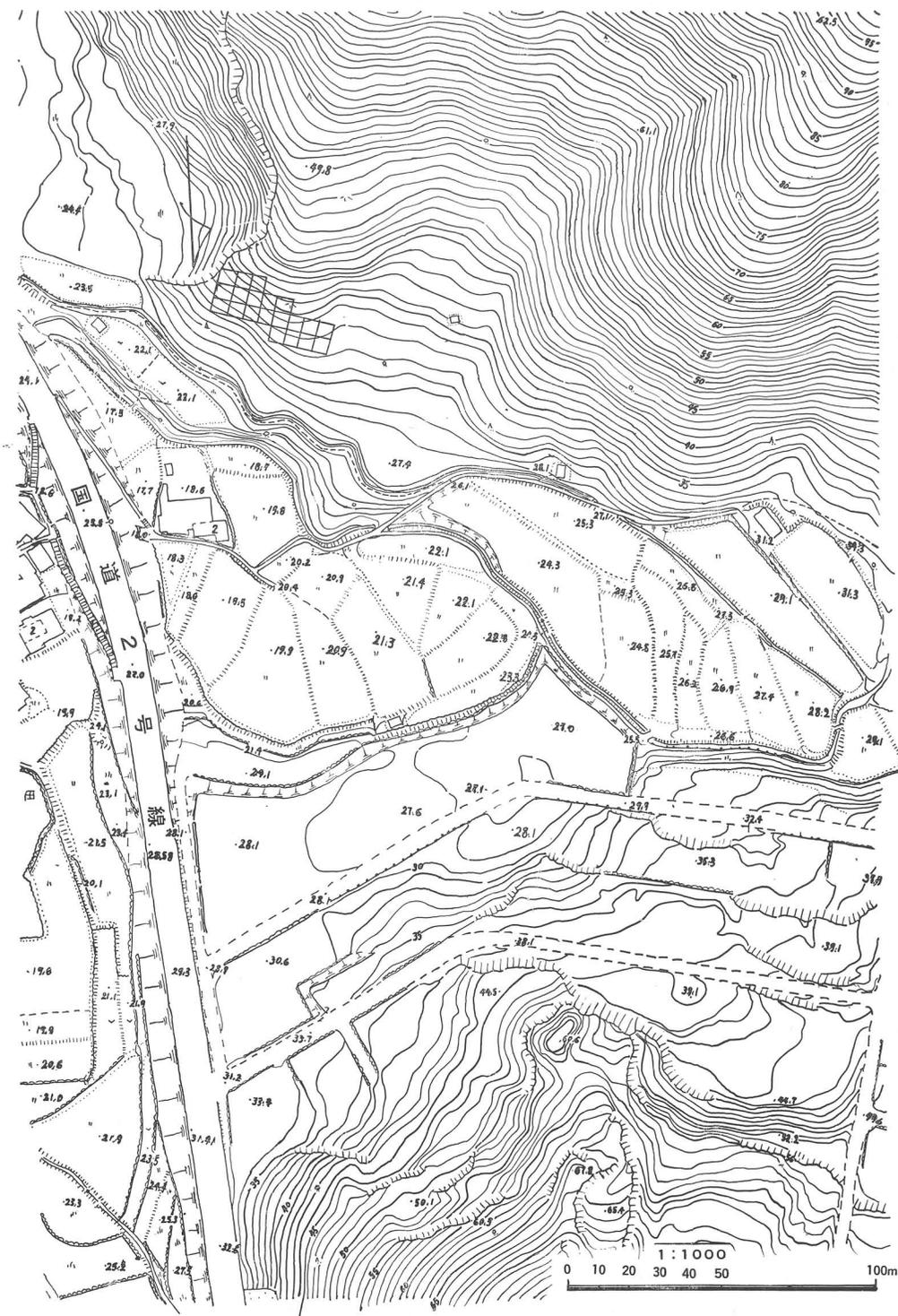
以上のように最近中部瀬戸内で、弥生中期後半から終末頃に方形住居が比較的豊富に見えられ、今後増加してくるだろうが、特に用木山遺跡の単位集団の発掘は暗示的であって、弥生中期後半の一時期に高地に移住した好例と考えられる。

以上のように中部瀬戸内地域の中期後半乃至終末期に方形住居が、かなり豊富に出現し、主として、尾根上や斜面に営なまれているが、本遺跡の住居址にも中部瀬戸内の要素が共通点として指摘されることを考えると、中部瀬戸内と同じ時期に統一国家形成への軍事的に混乱が襲来したと考えられる。

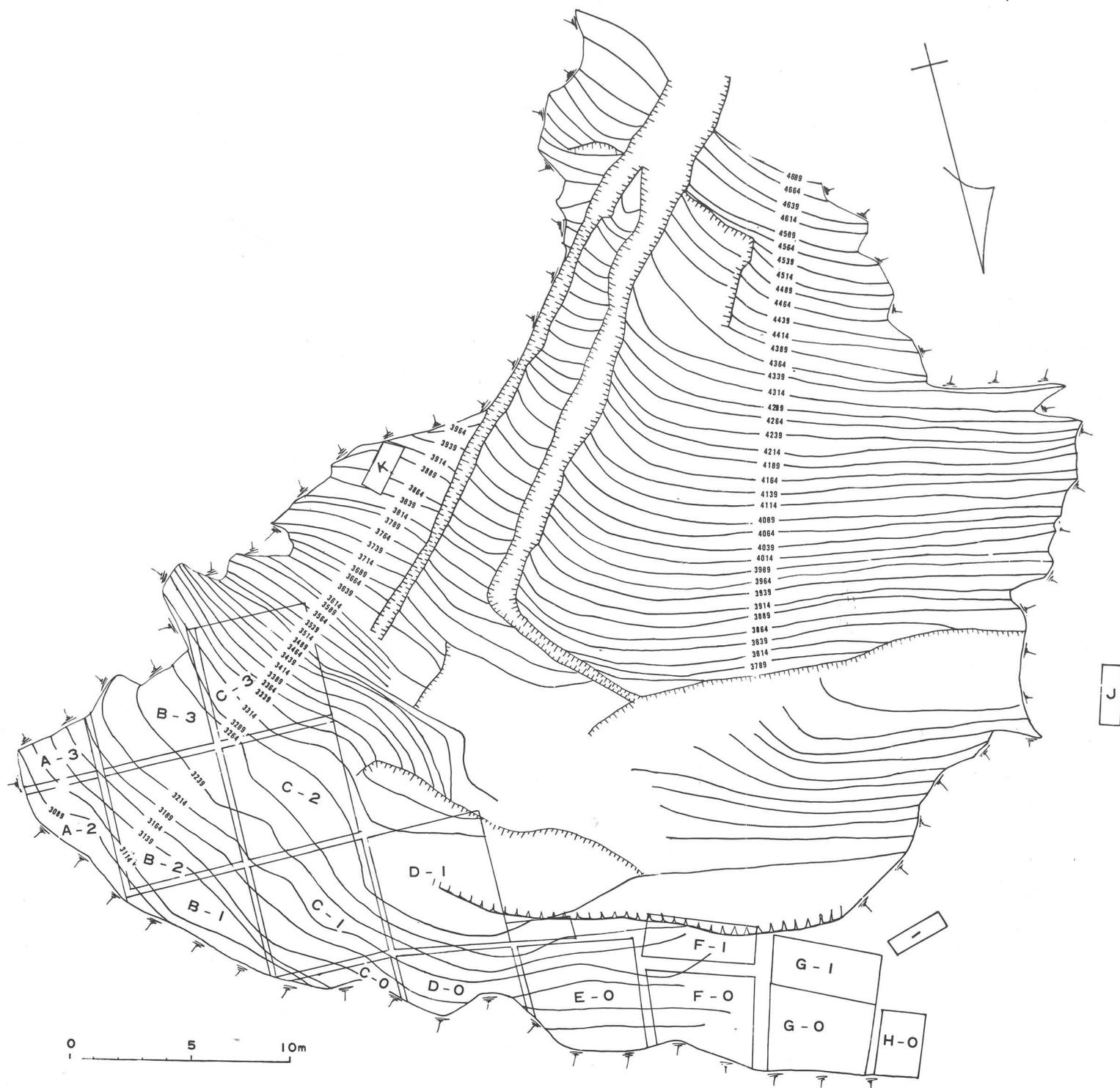
(上 田)

第1図 遺跡附近の地形図 ×印が調査地 ○印が住居址確認地点

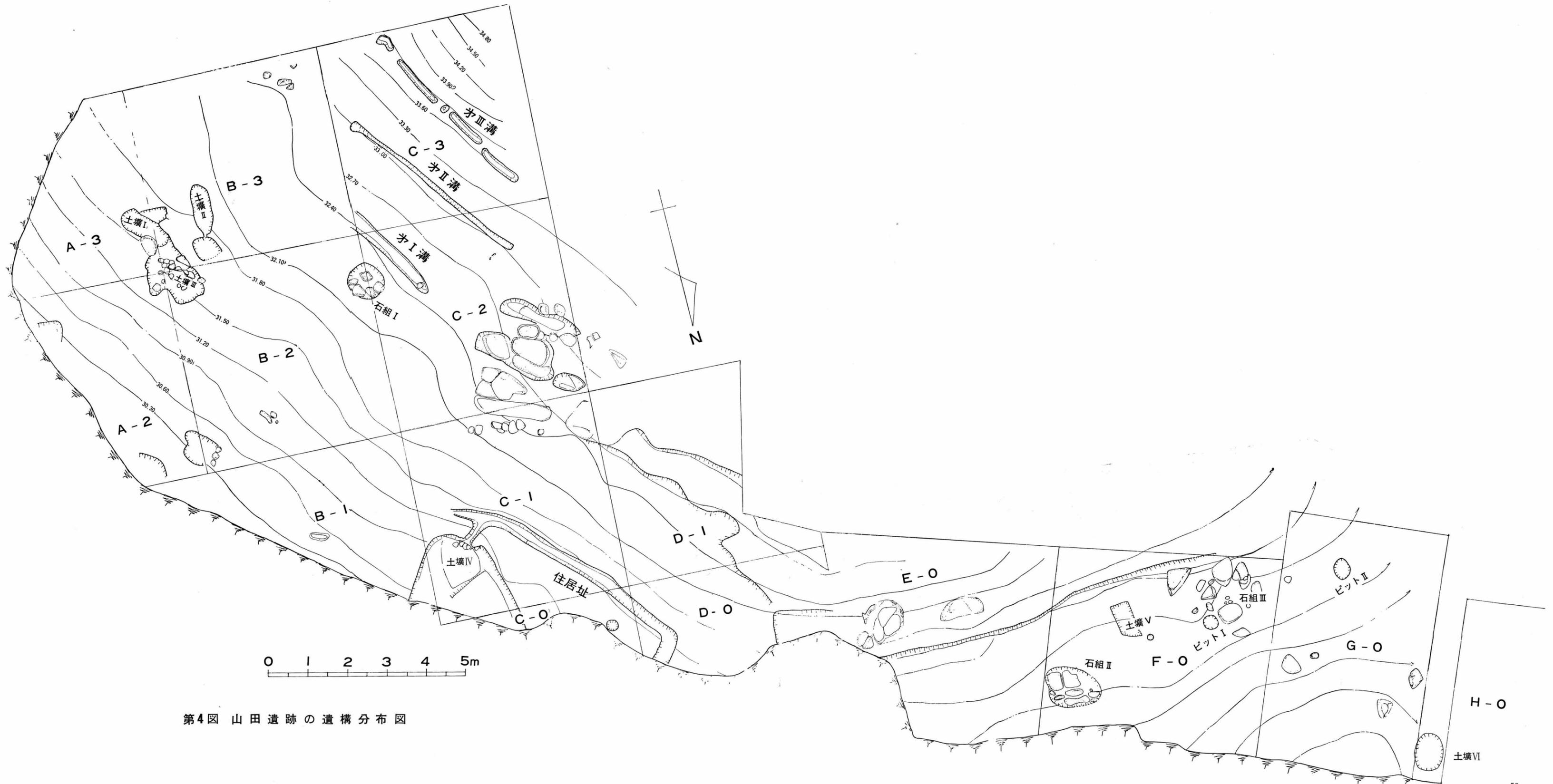




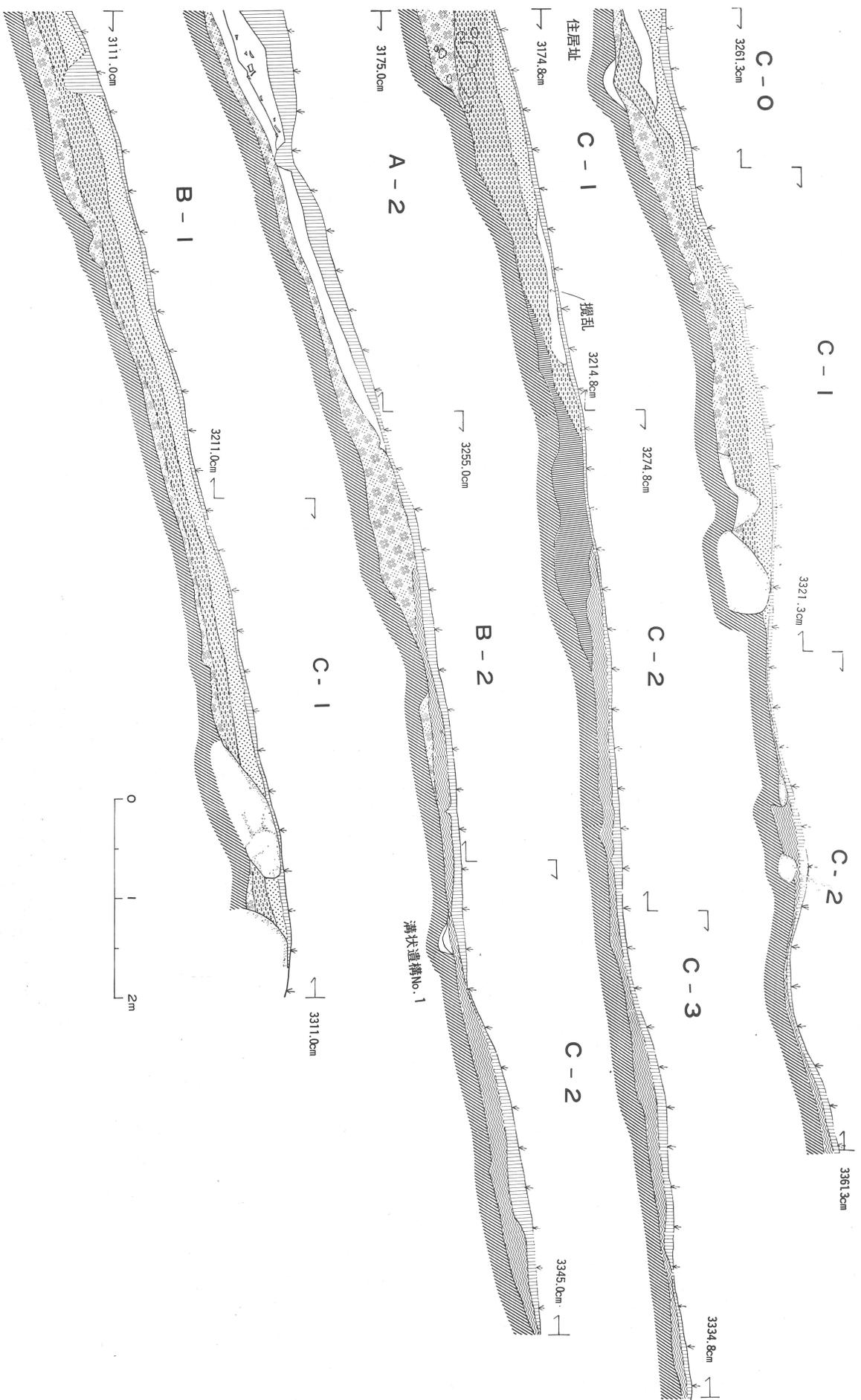
第2図 遺跡の旧地形（グラフ部分が調査地区）



第3図 グリッド配置図



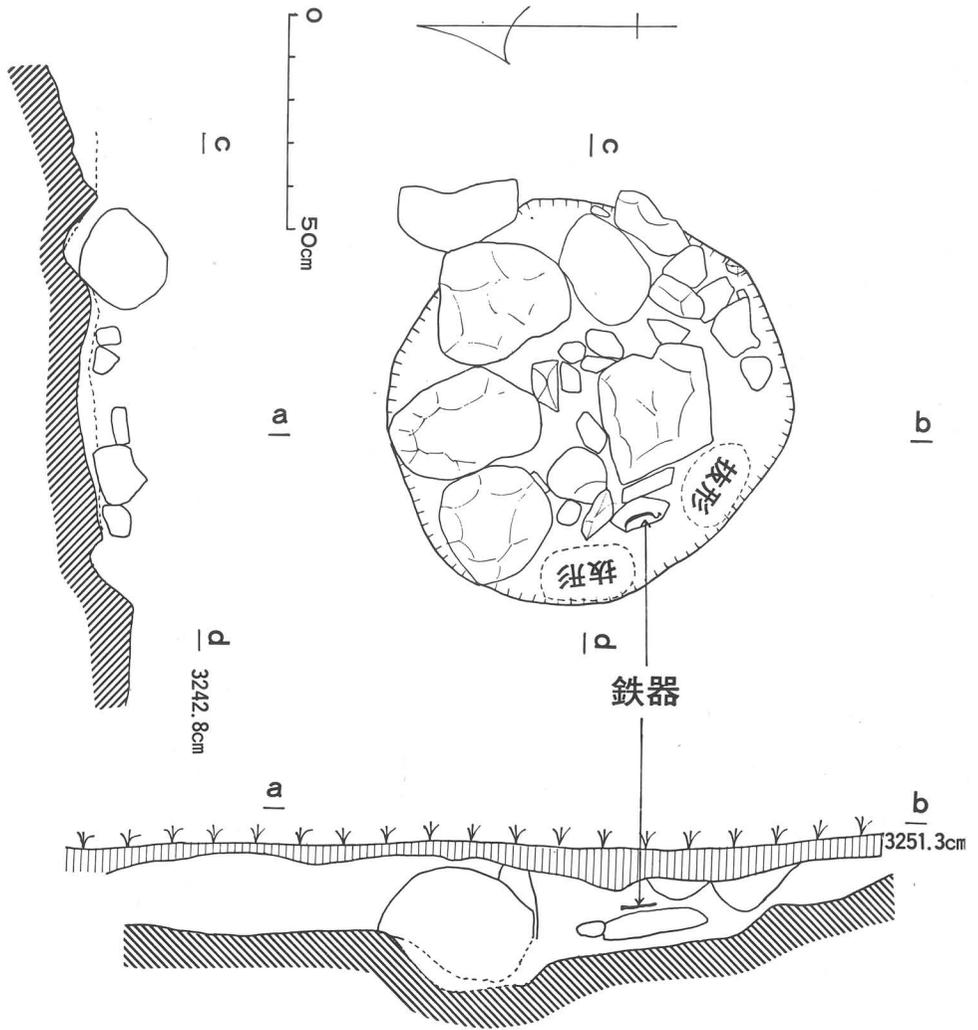
第4図 山田遺跡の遺構分布図



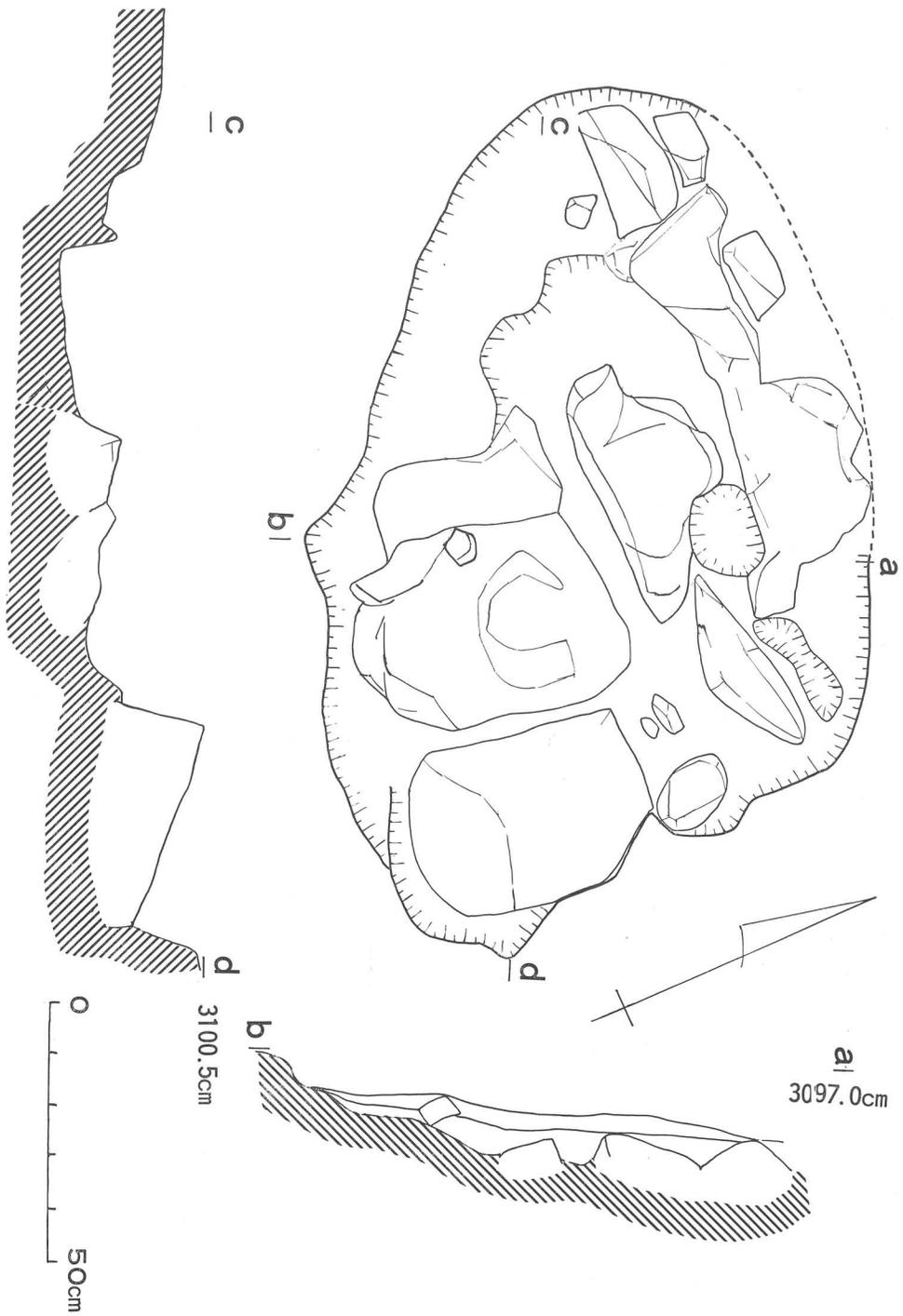
第5図 山田遺跡土層図



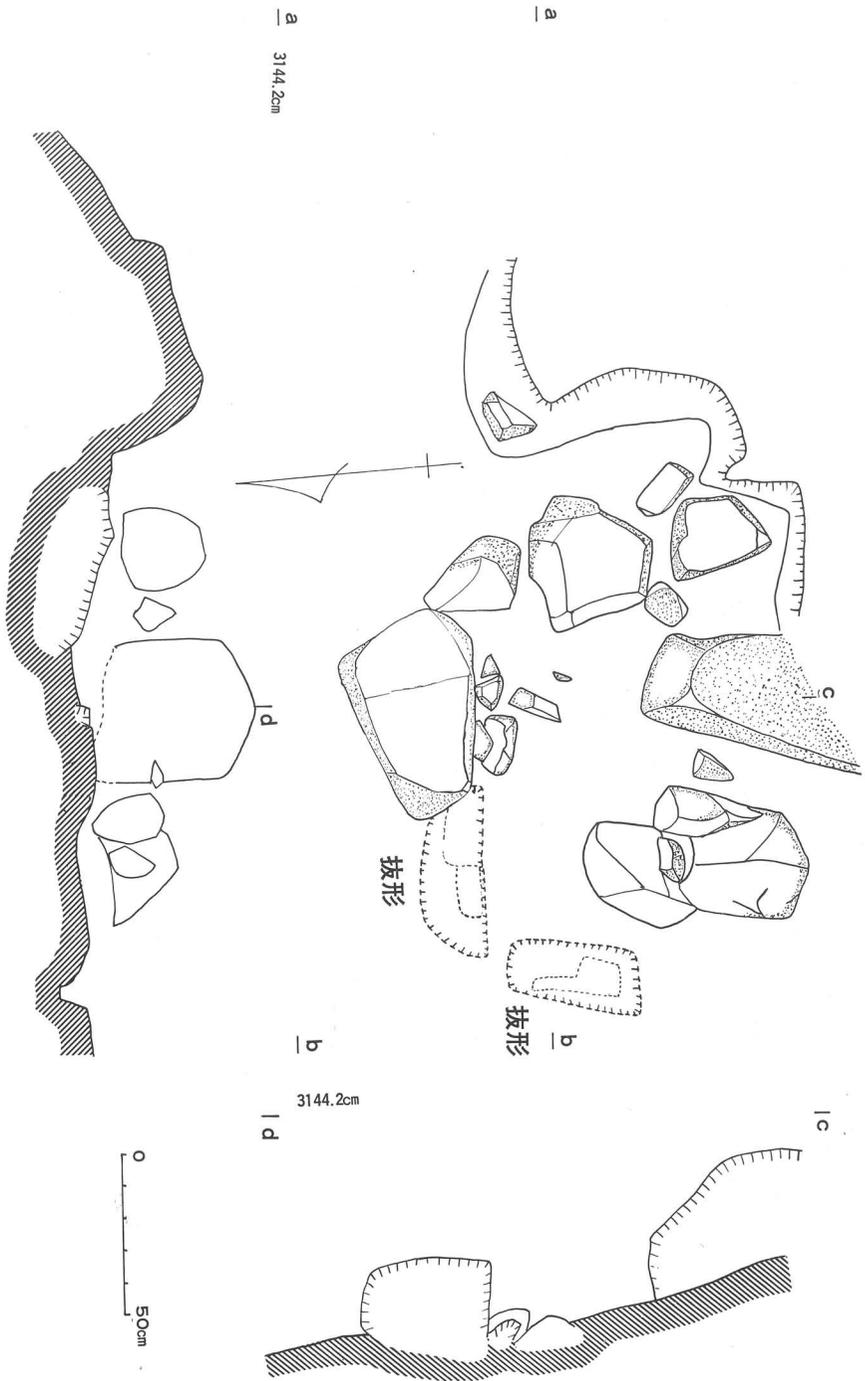
第6図 山田遺跡住居址実測図



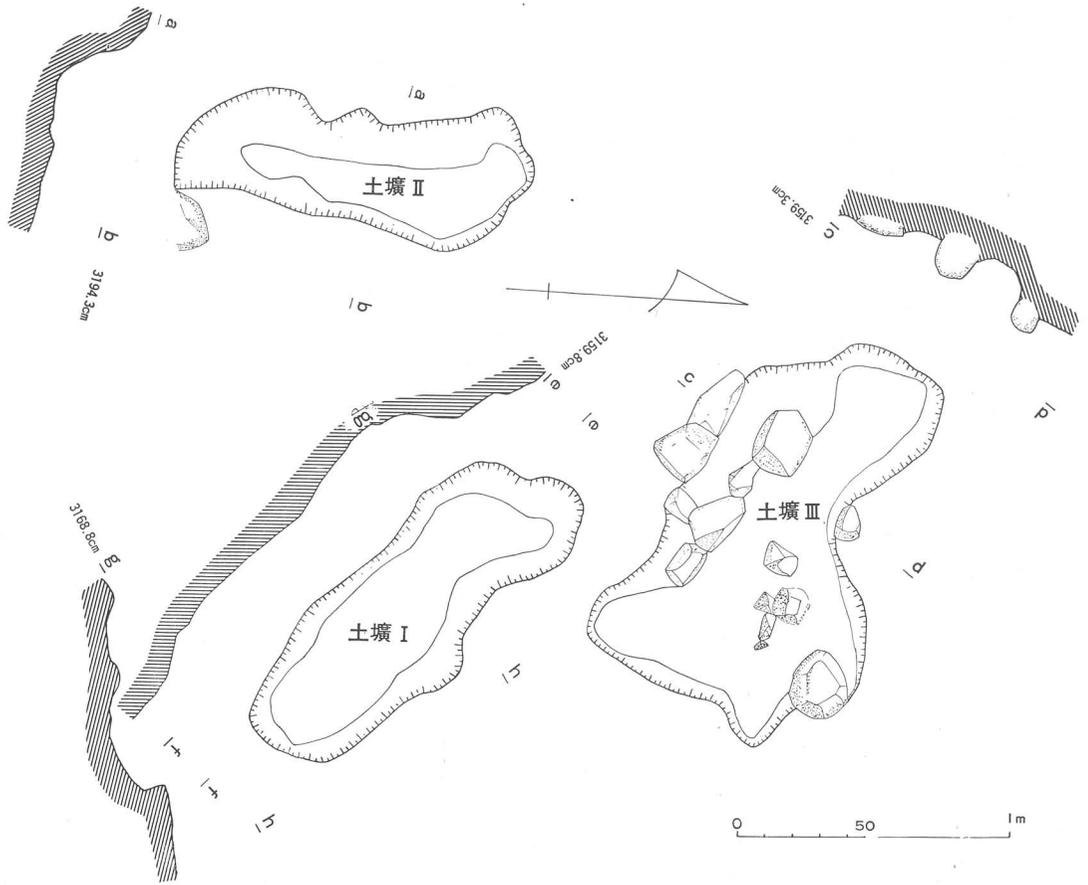
第7図 石組遺構 I



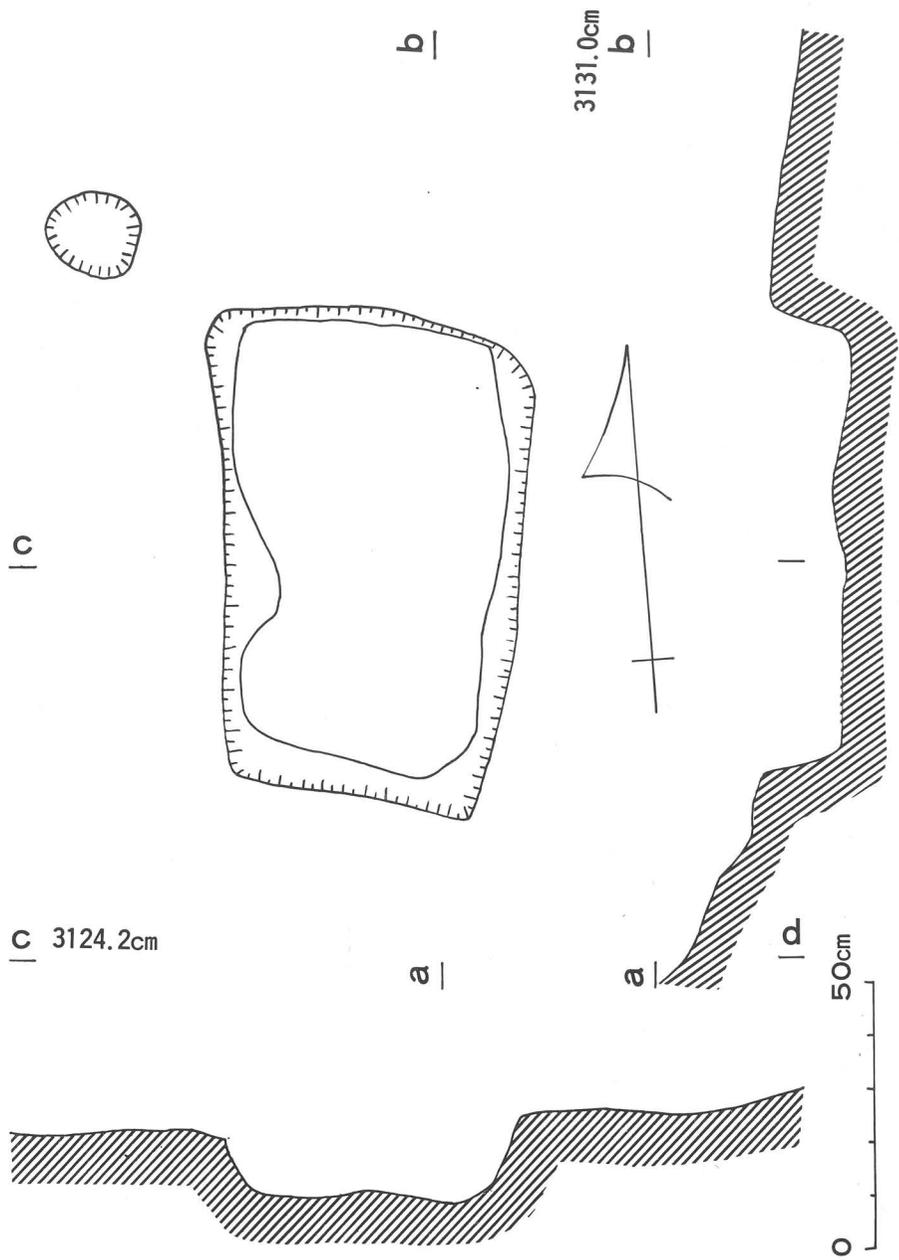
第8図 石組遺構 II



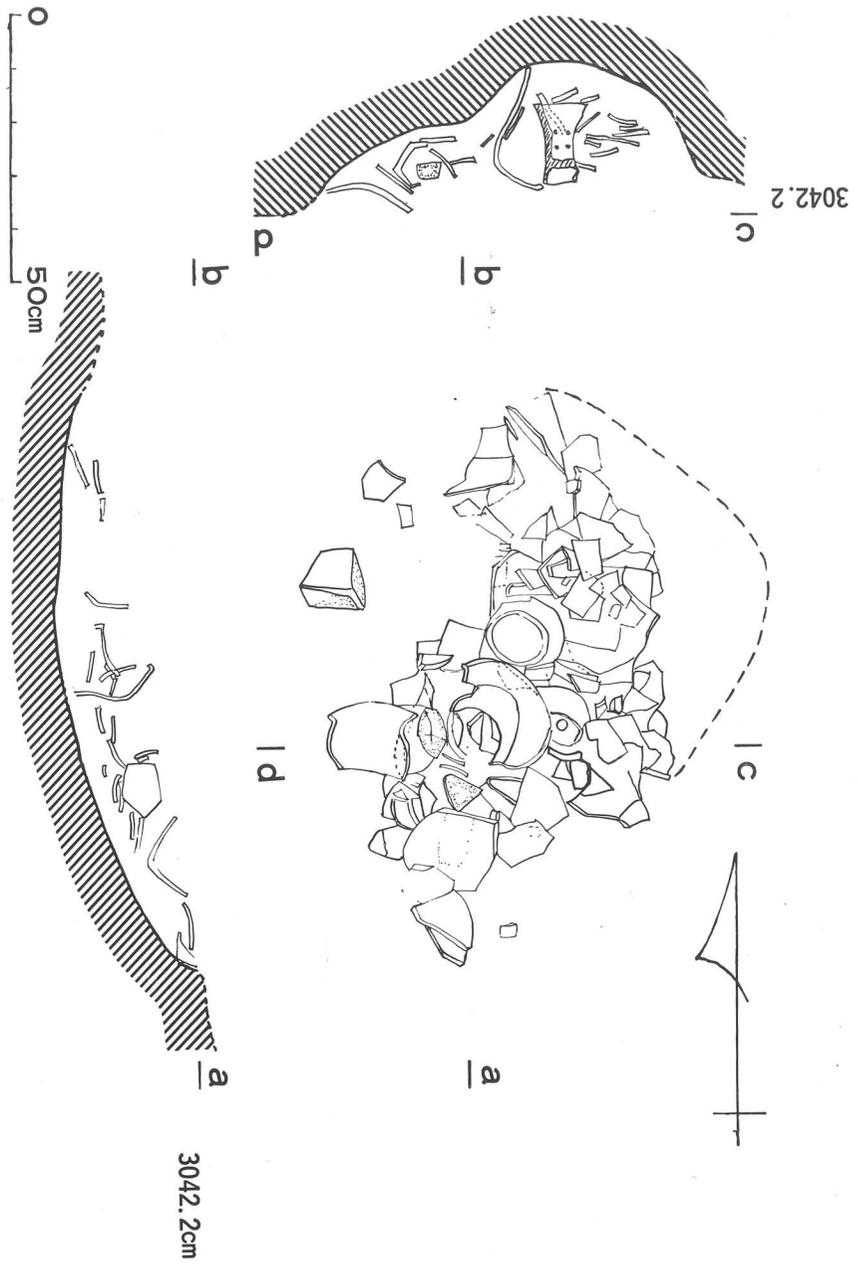
第9図 石組遺構Ⅲ



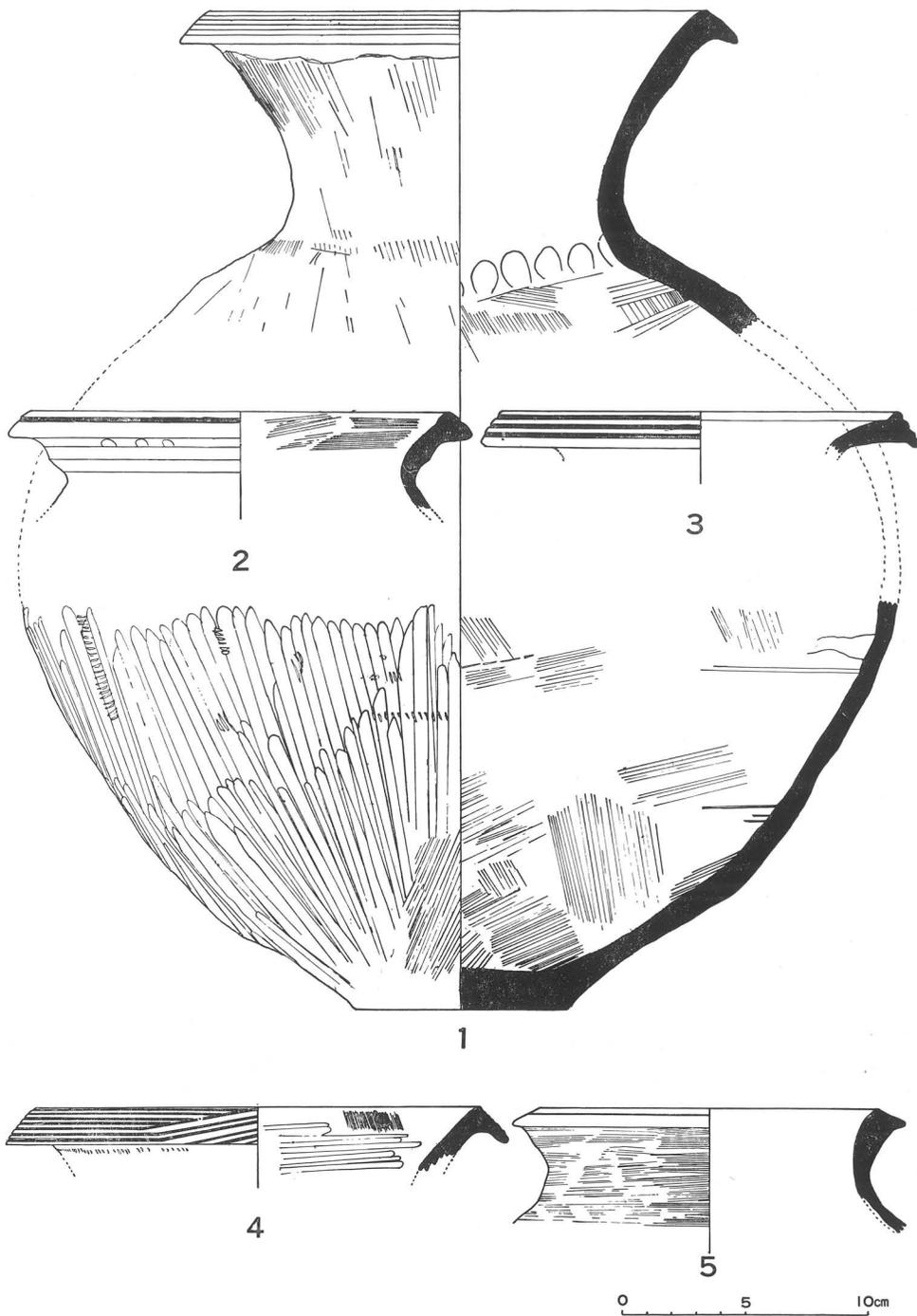
第10図 土壤実測図 (I—III)



第11図 土壤遺構V実測図

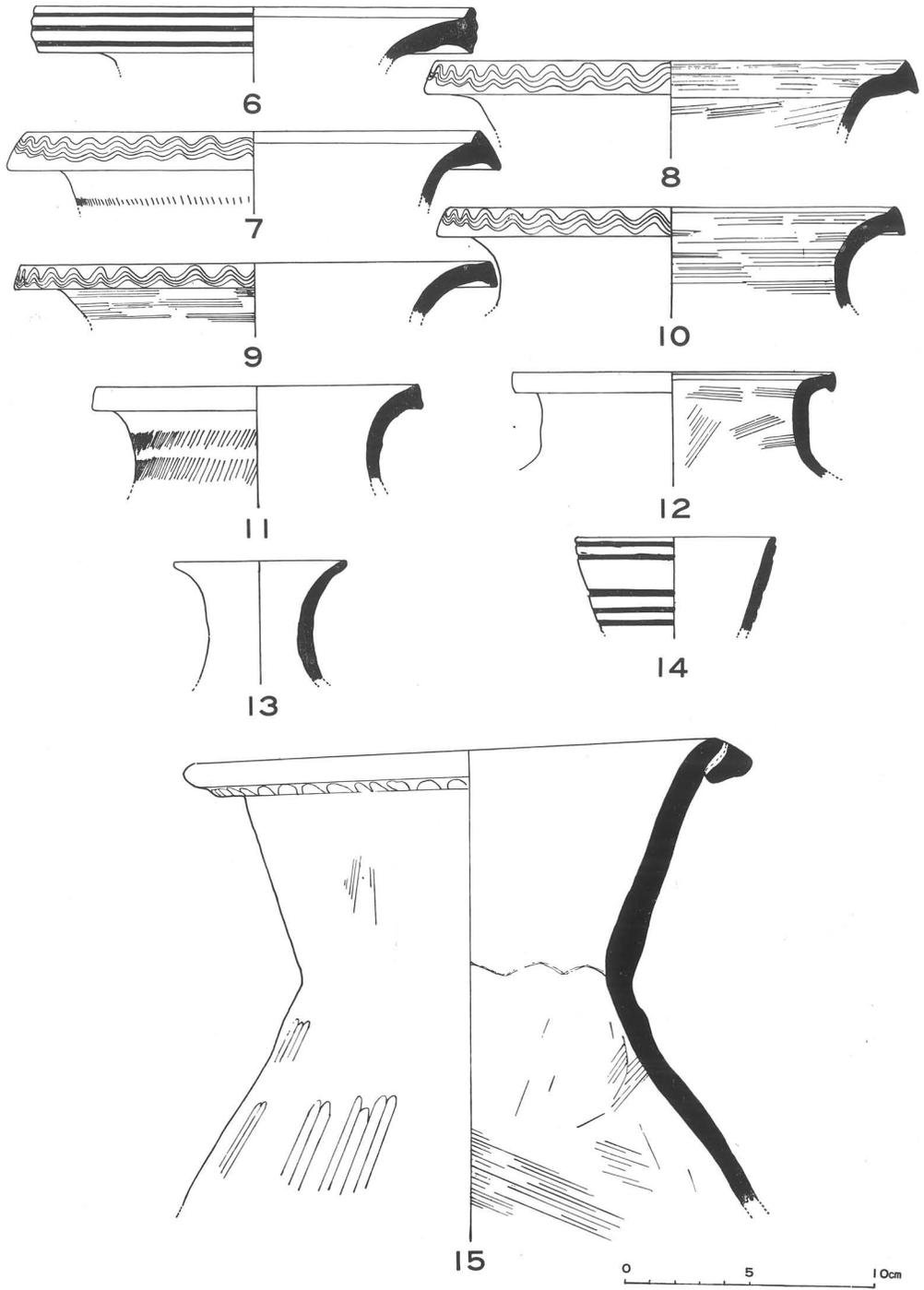


第12图 土壤VI、土器出土状况实测图



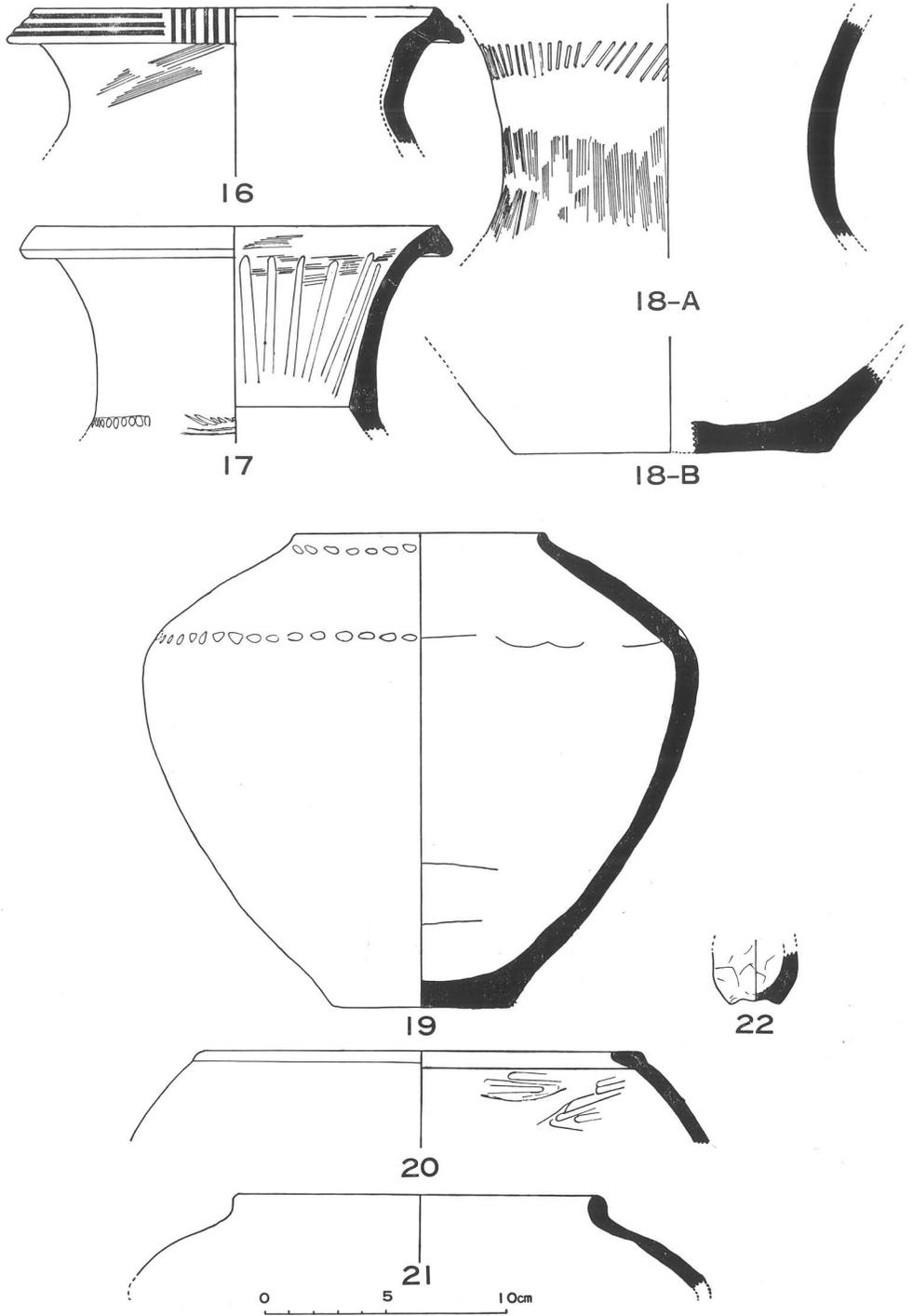
第13图 壺形土器

1、2、4：土壙VI
3：住居址・5：J



第14图 壺形土器

6、13：住居址
 7、8、9、10、11、12、14：A-2
 15：土城VI

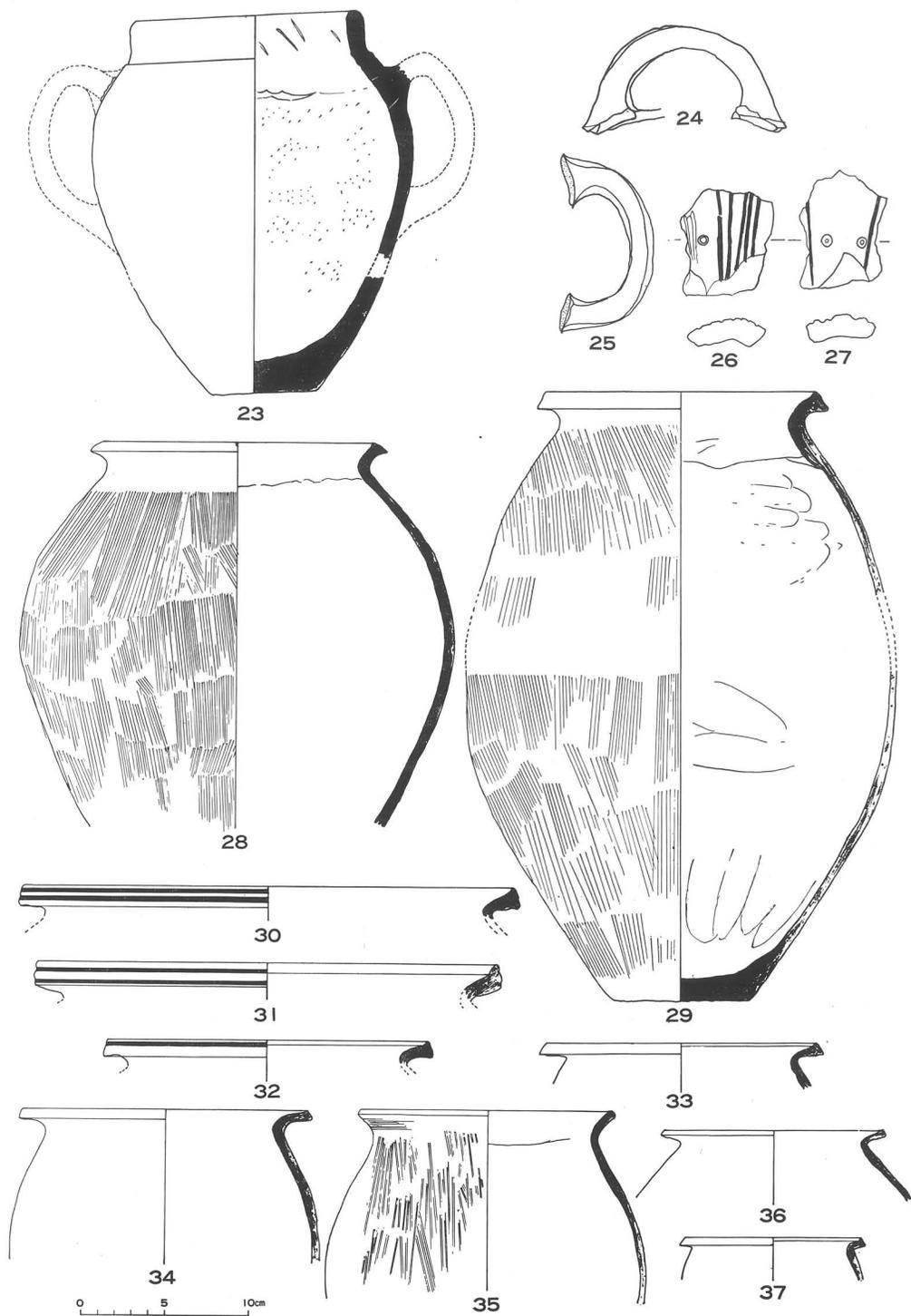


第15图 壺形土器

16、17、18-A·B、19、21：土壙VI

20：A-2

22：住居址



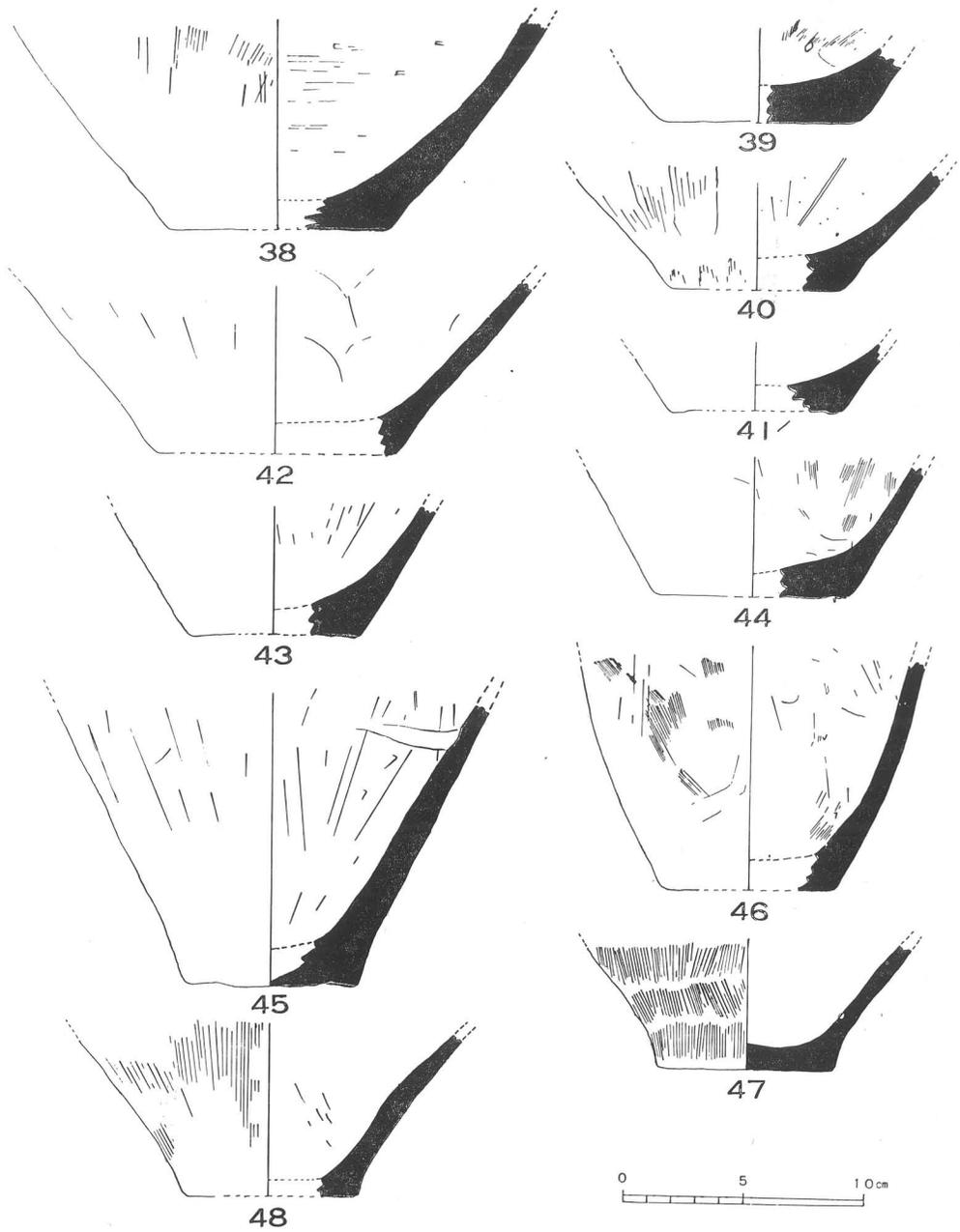
第16图 甕形土器

23、28、29、37：土壙VI

25、26、27、30、32：J

33~35：A-2

24、36：住居址

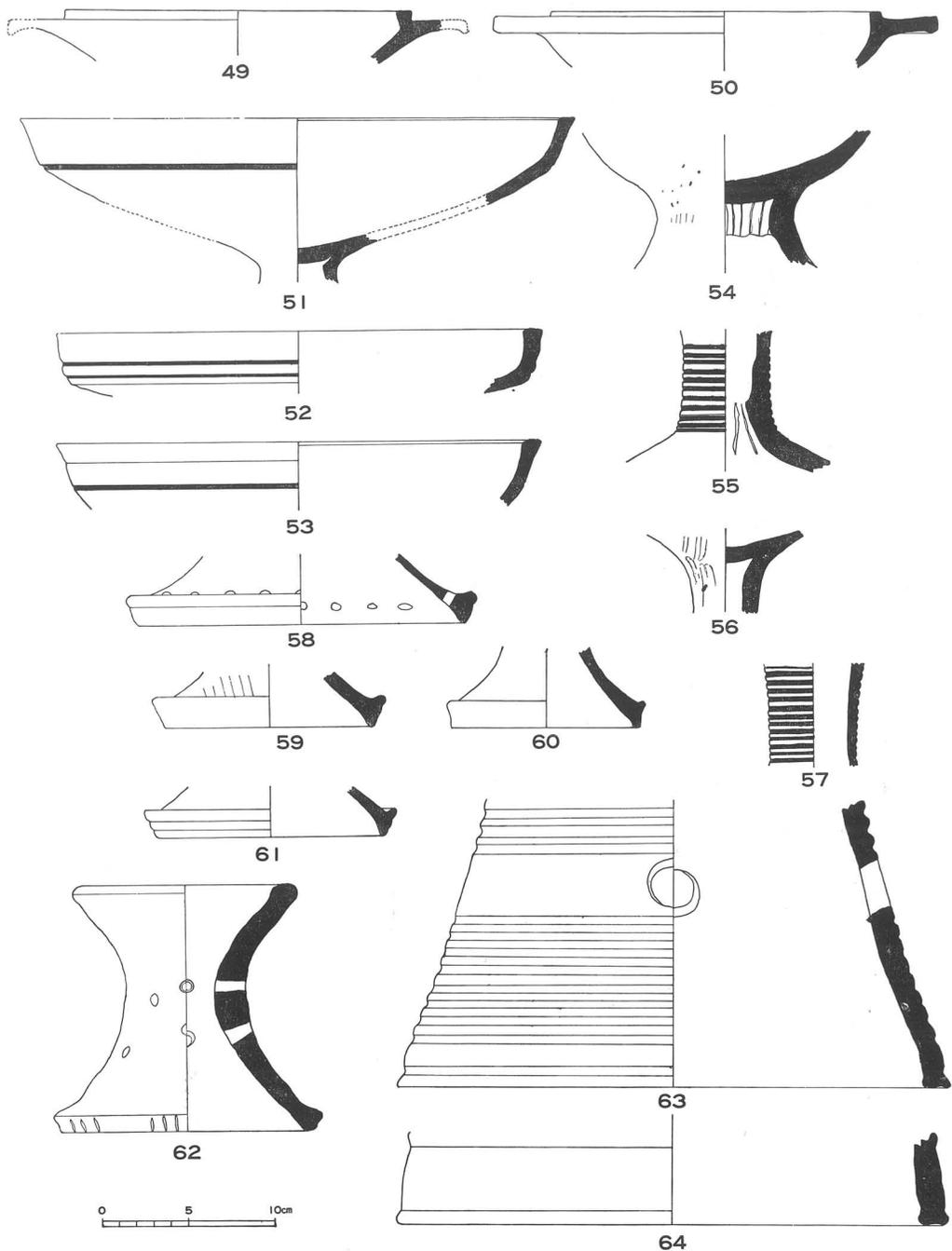


第17図 土器の底部

38、39、40、41、42、44、45、46：土壙VI

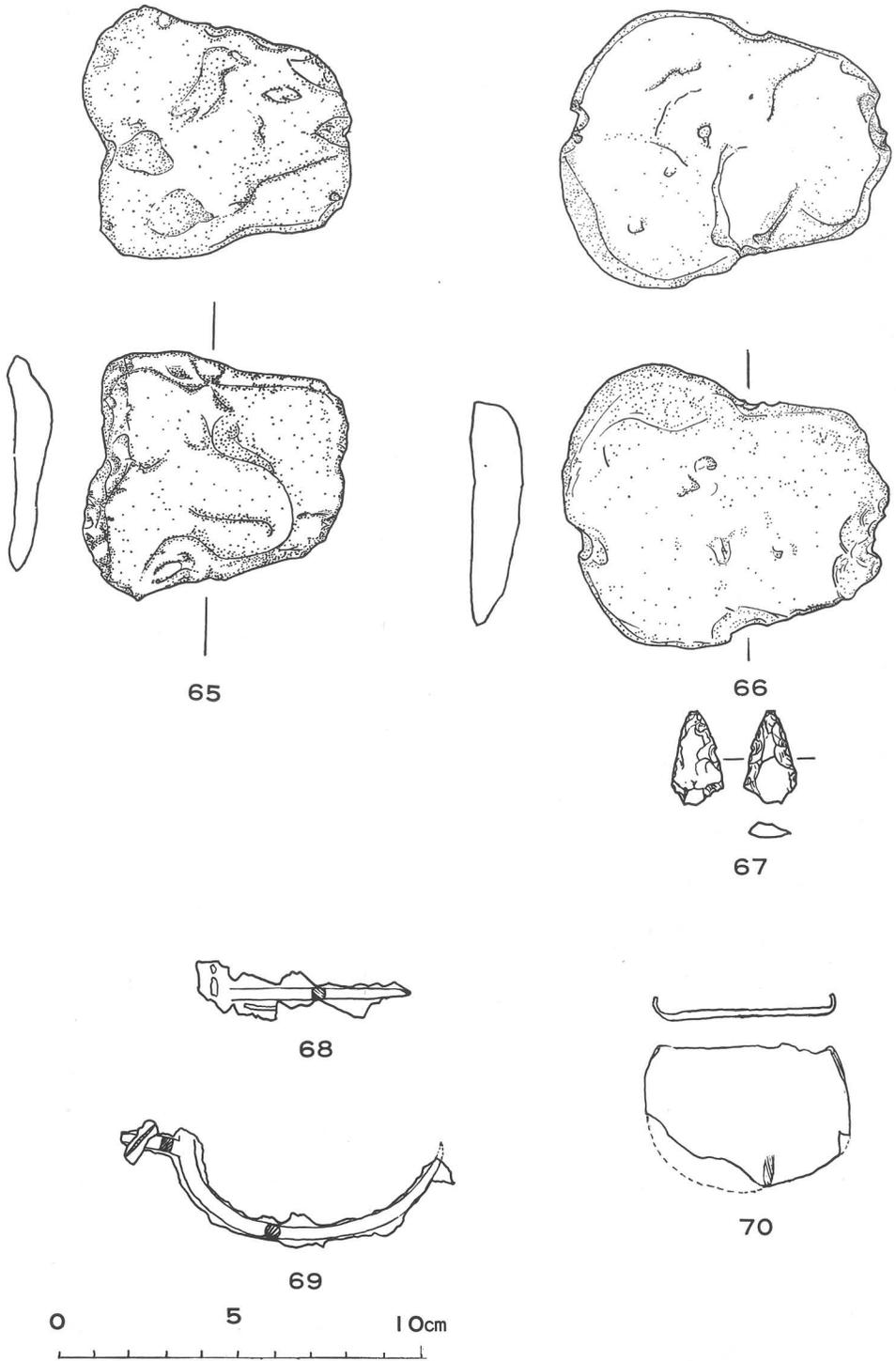
43：J

47、48：表採



第18図 高杯、器台

49、52、54、60、62：F
 50：表面採集
 55、56、63、64：住居址
 51、61：石組Ⅲ
 53、57、58：A—259：J

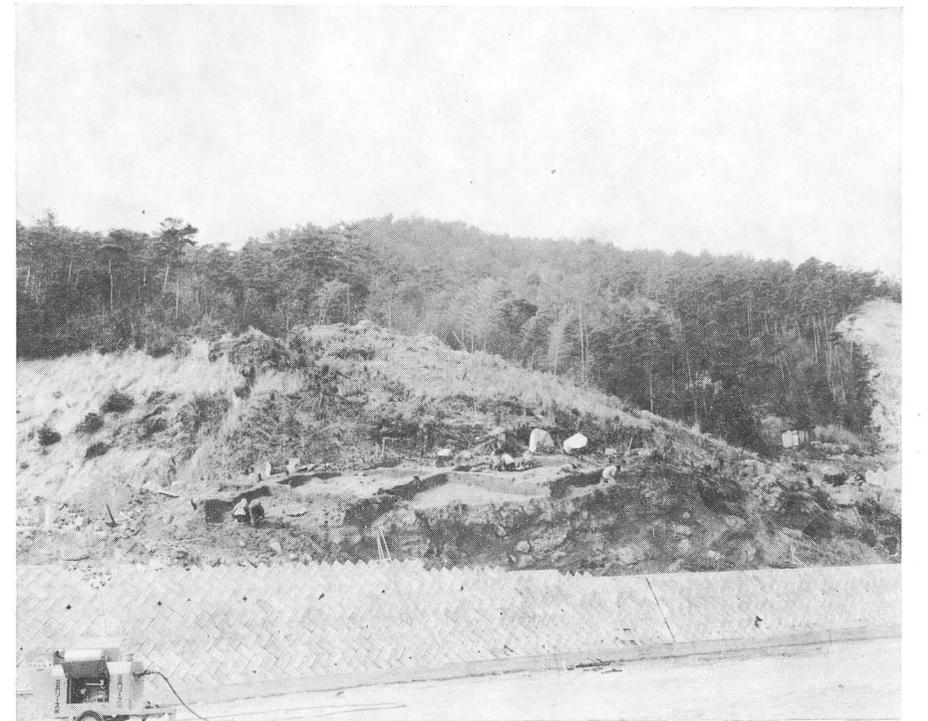
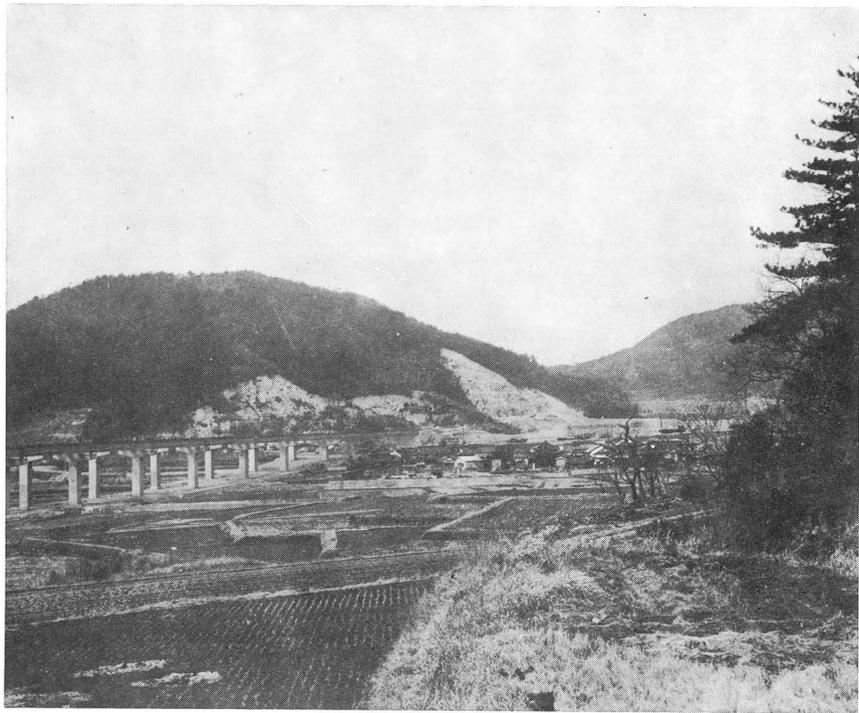
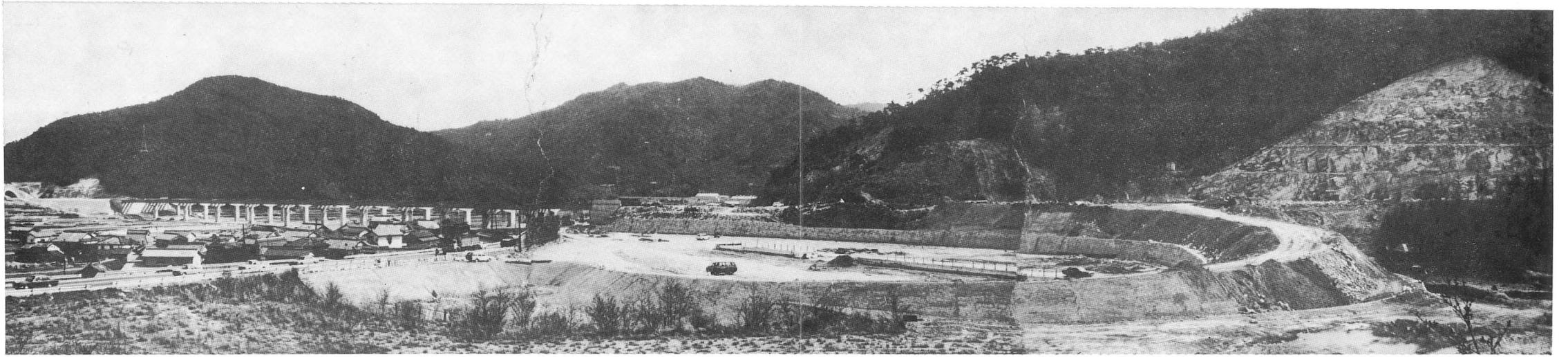


第19図 石器 鉄器

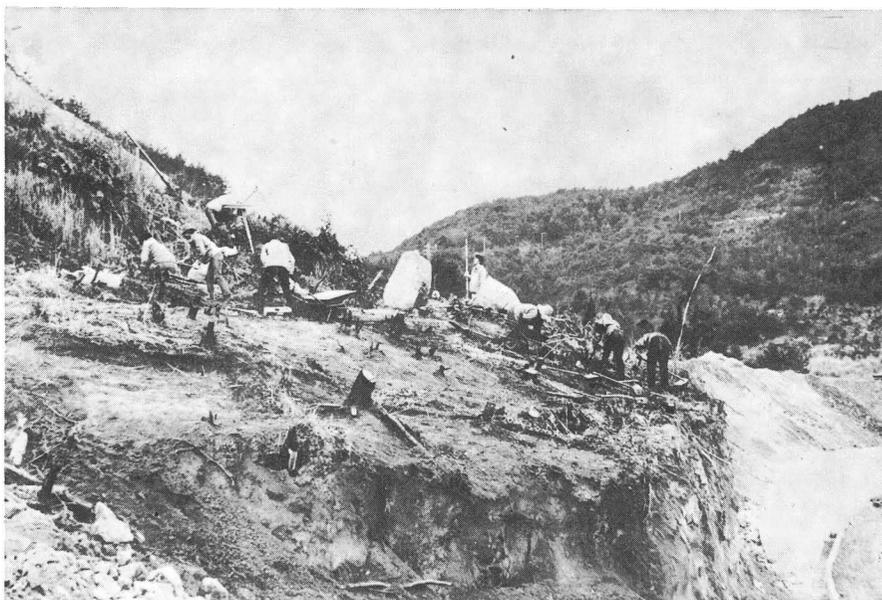
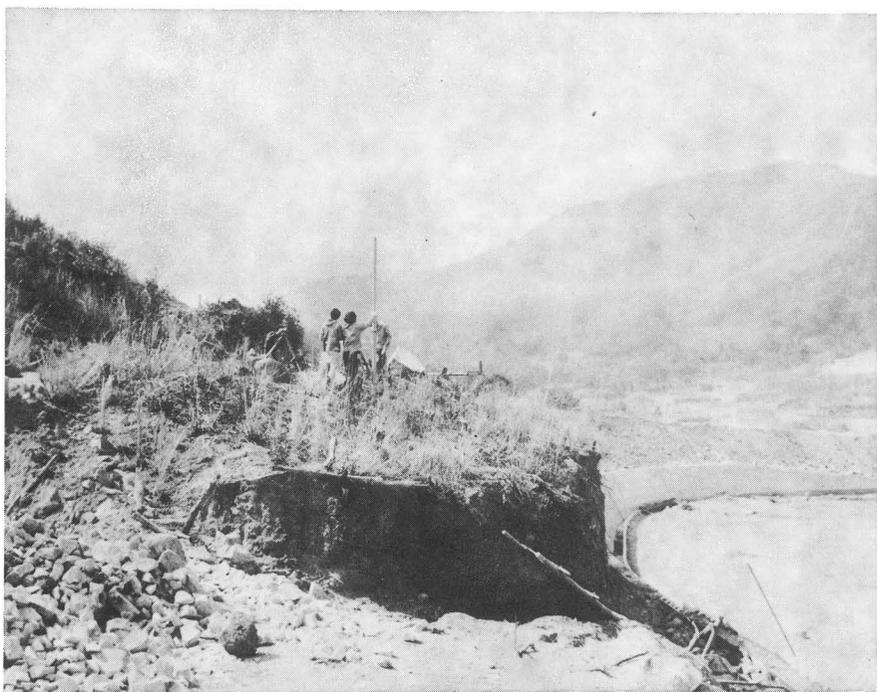
65：住居址67、70：表面採集

66：B-3

68：B-1 69：石組I



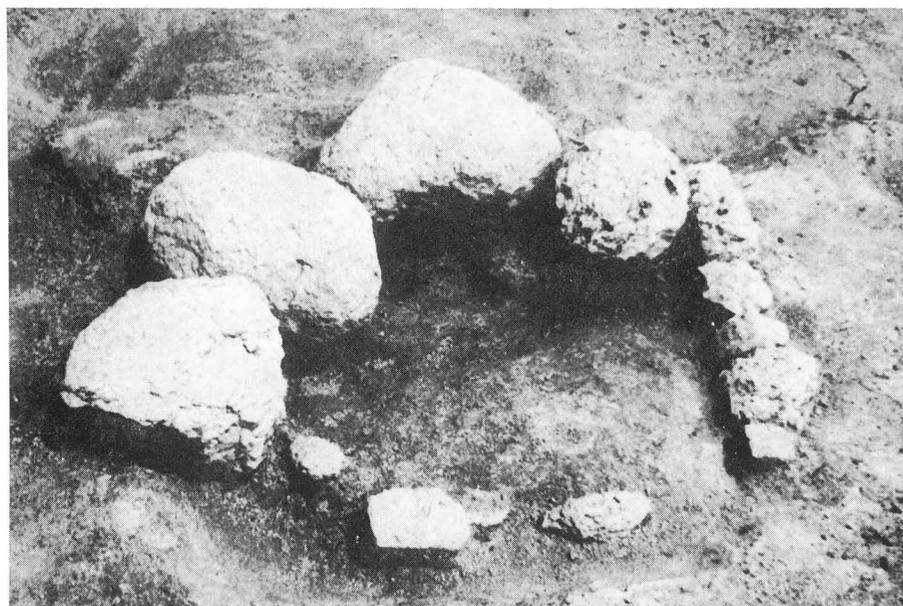
写真—1 遺 跡
 (上) 北方斜面より見た遺跡と南方の景観
 (下左) 東方より見た遺跡と西方の景観
 (下右) 北側より見た近景



写真—2

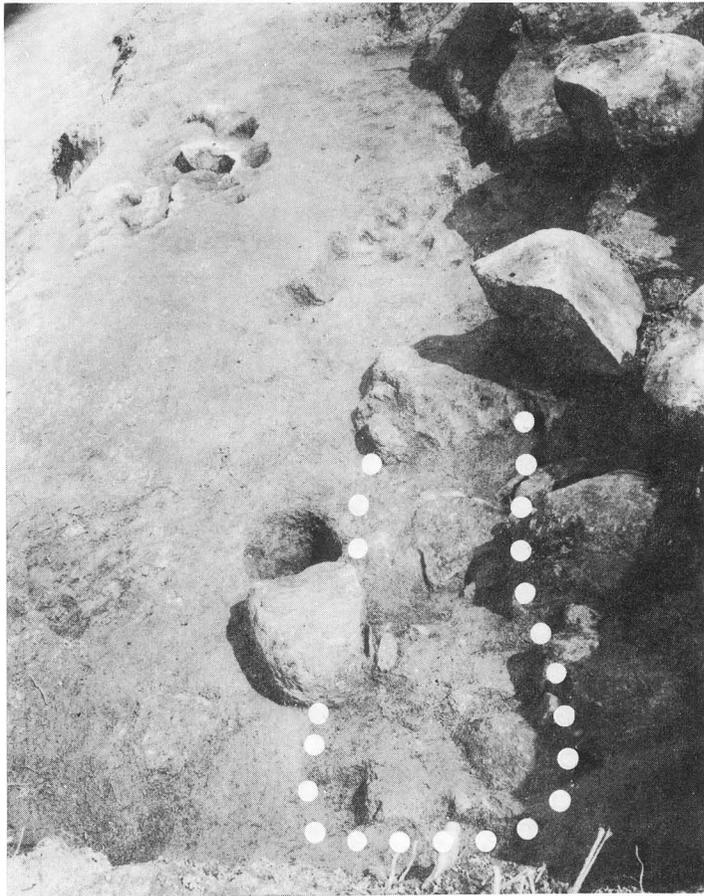
(上) 調査前の状況(東より)

(下) 東側より見た近景



写真一3 石 組

(上) 石 組 I
(下) 石 組 I



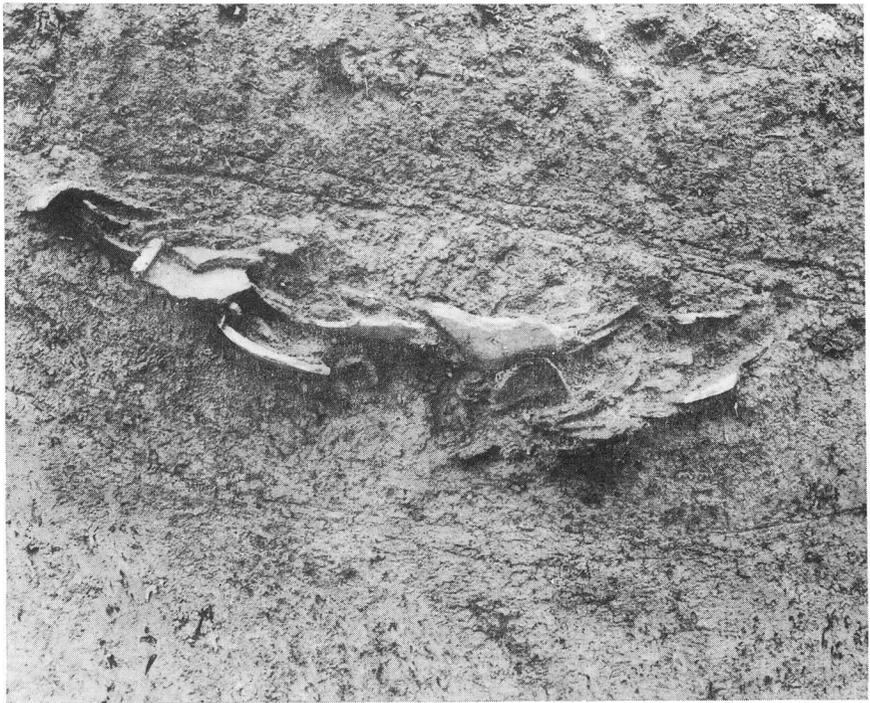
写真一4

(上) 石組Ⅱ
(下) 石組Ⅲ

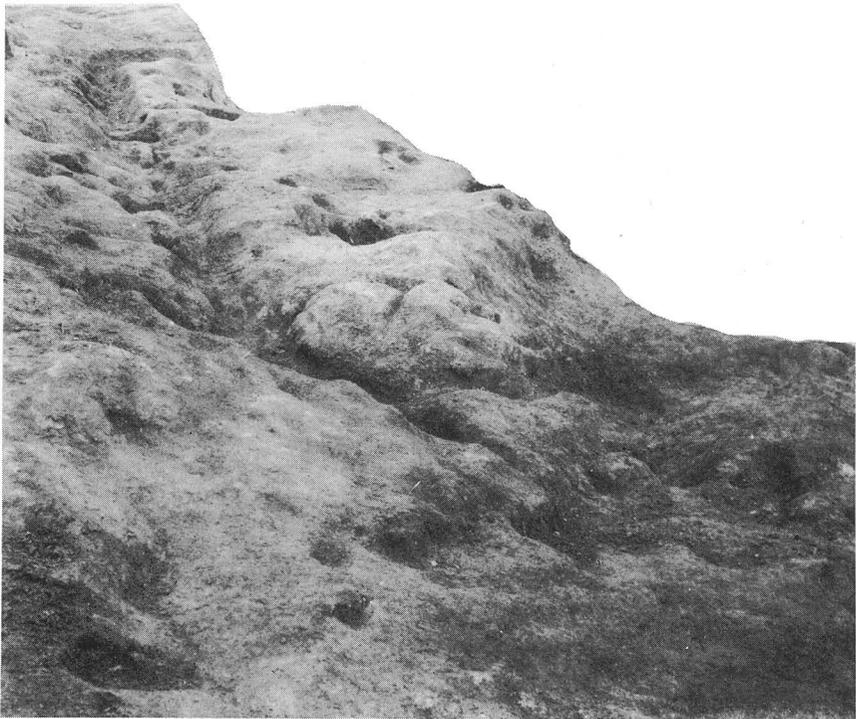
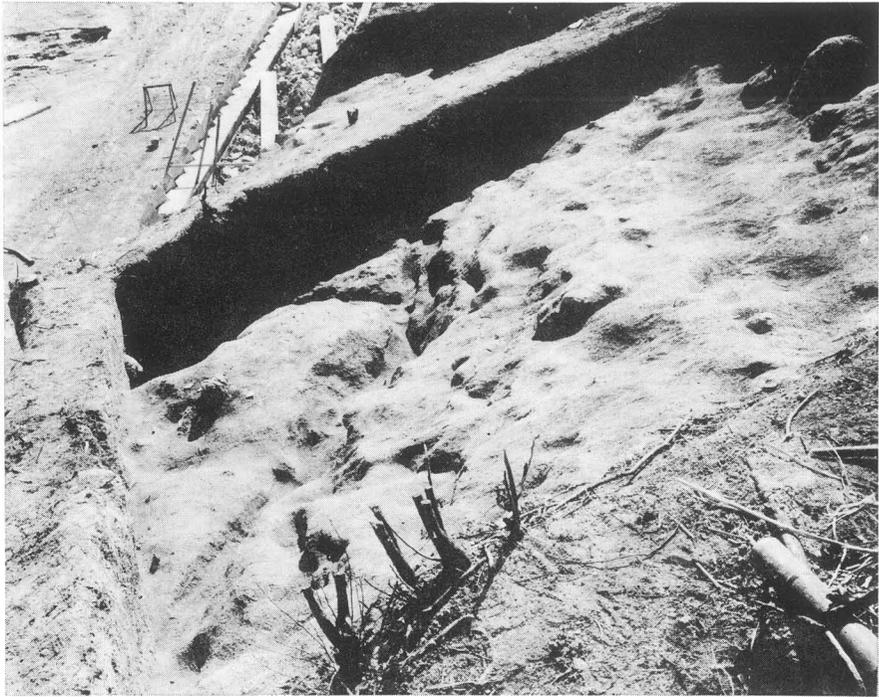


写真—5

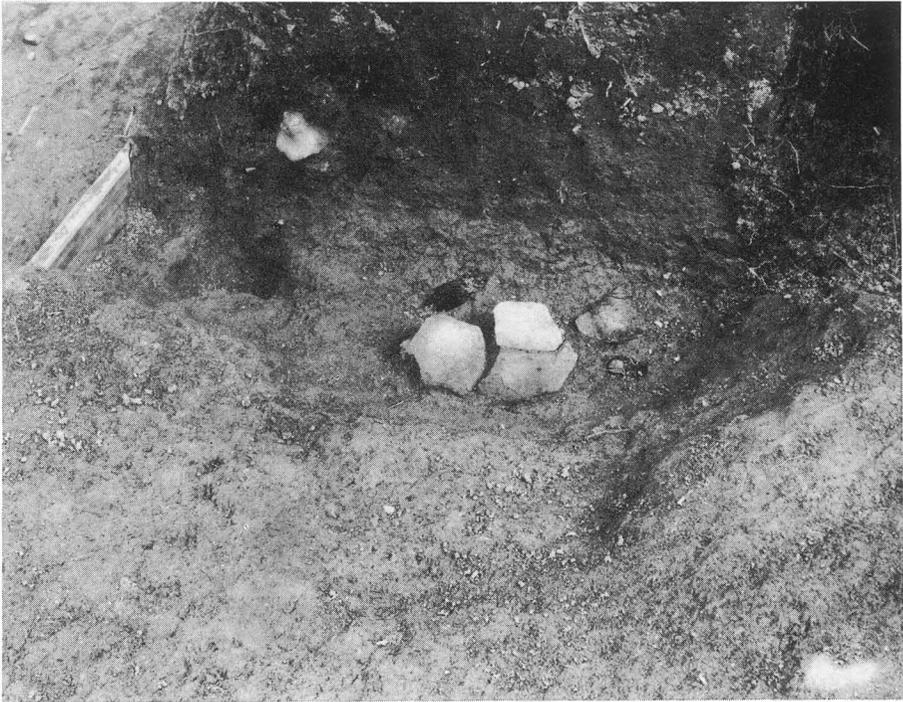
(上) 土 壤 V
(下) 土 壤 III



写真—6 土 壤 VI (上) 土器出土状況
(下) 土 壤 の 断 面



写真一7 竪穴式住居址 (上) 住居址の壁
(下) 住居址の全景



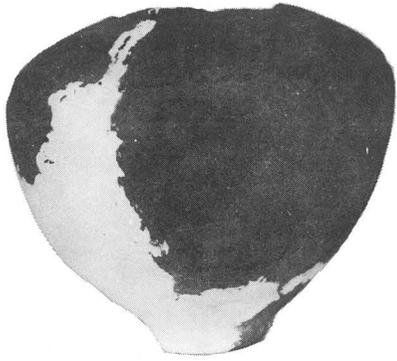
写真—8

(上) 住居址に続く地山の切断面状況(径)

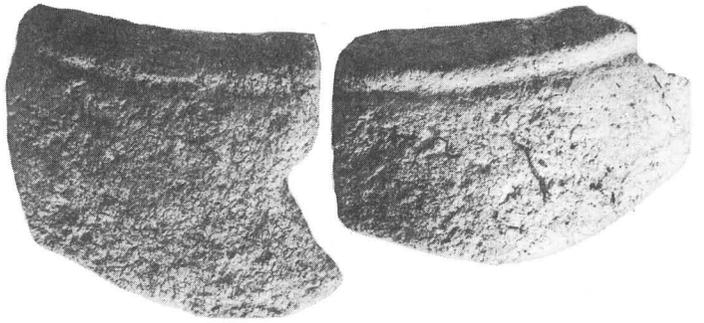
(下) 住居址に続く地山切断と土器



写真—9 溝と器台 (上) 溝状遺構
(下) 器台形土器出土状況



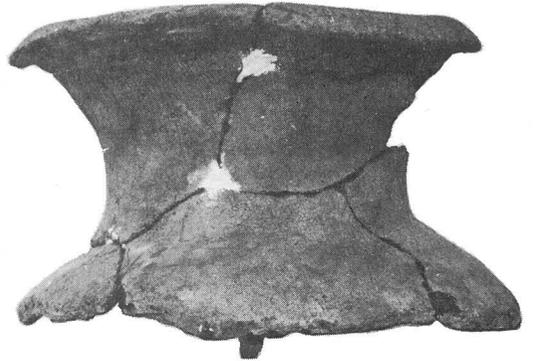
2



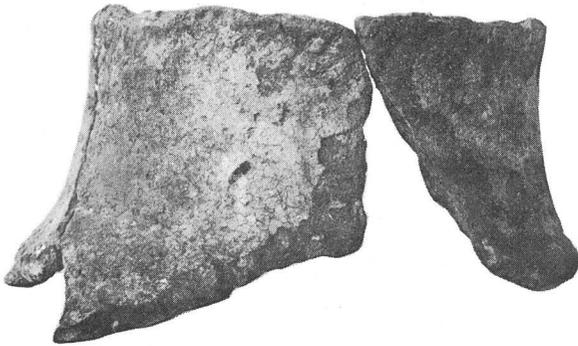
1



4



3



6



5

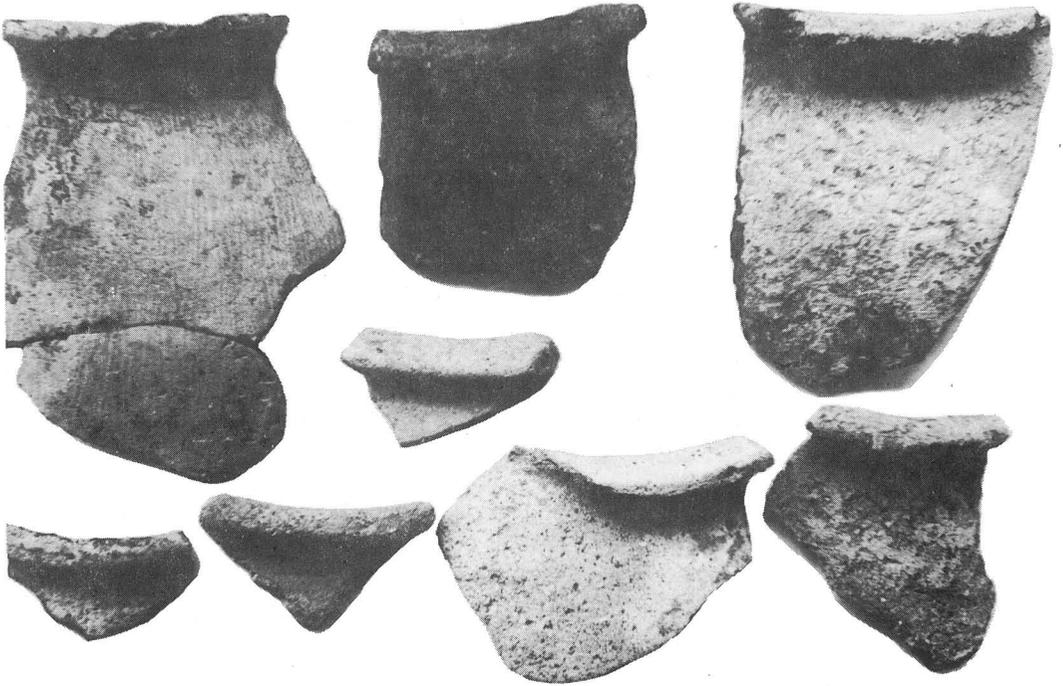
写真一〇 壺形土器



8



7



9

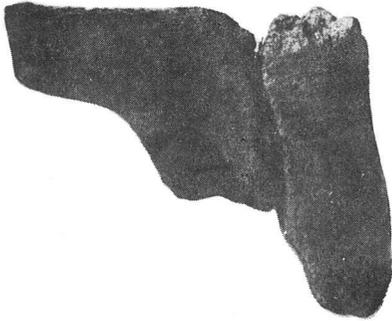
写真—11 甕形土器



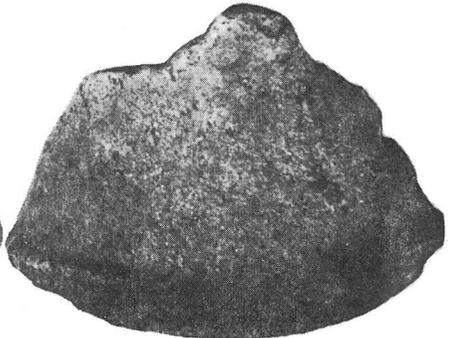
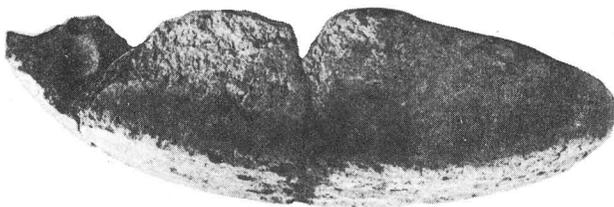
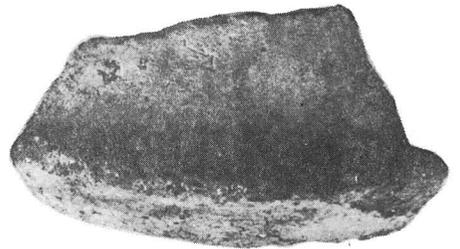
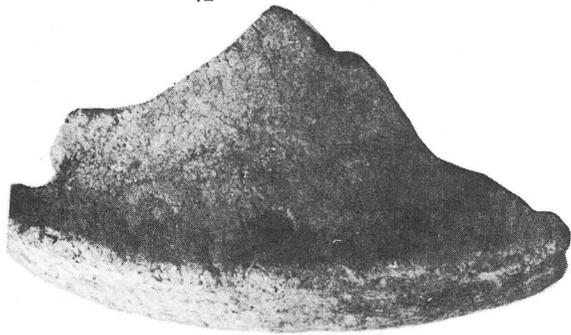
11



10

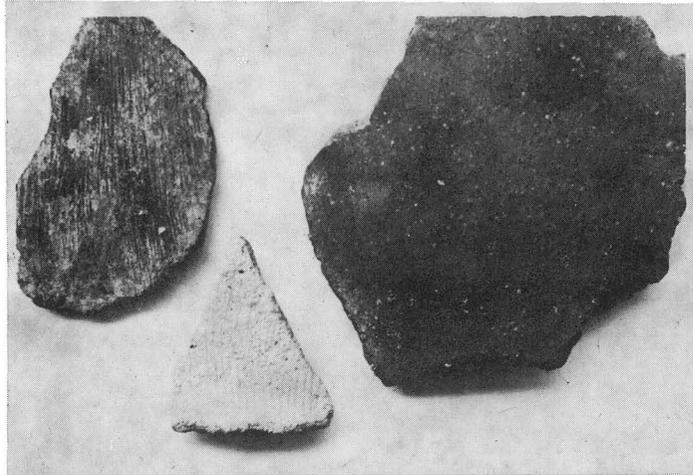
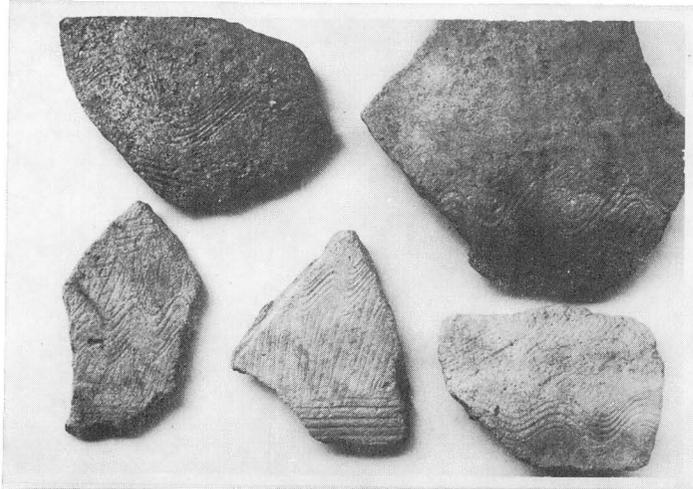
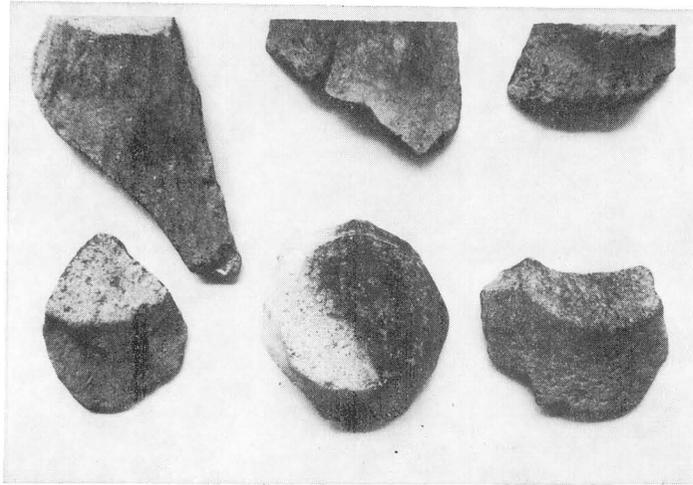


12



13

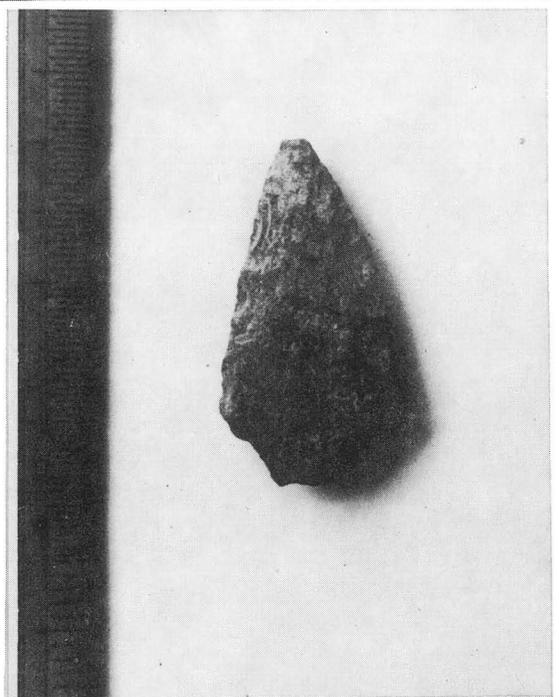
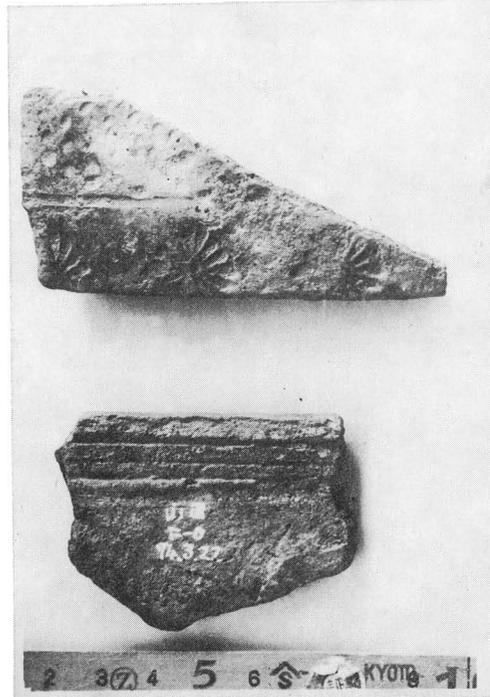
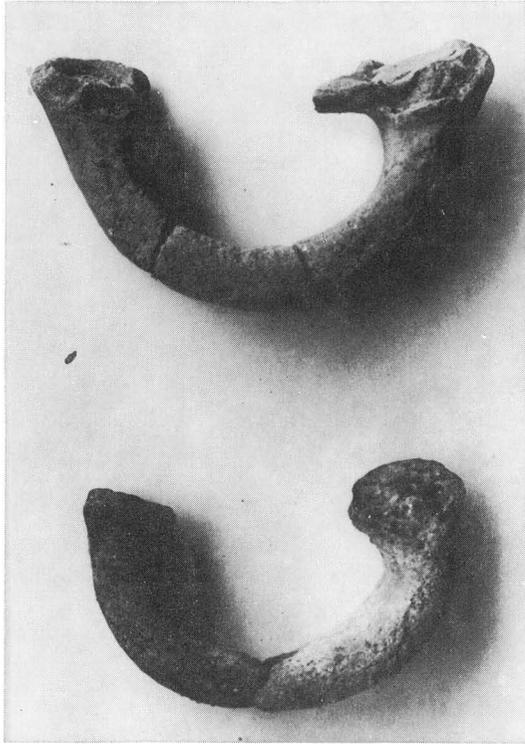
写真—12 高杯、器台形土器



写真—13

土 器

(上) 土器の底部
 (中) 櫛描波状文
 (下) 刷毛目仕上げの種々



写真—14 土器と石鏃 (右上) 土製品 (左上) 握り突手
(右下) 石鏃 (左下) 近世の土製品?

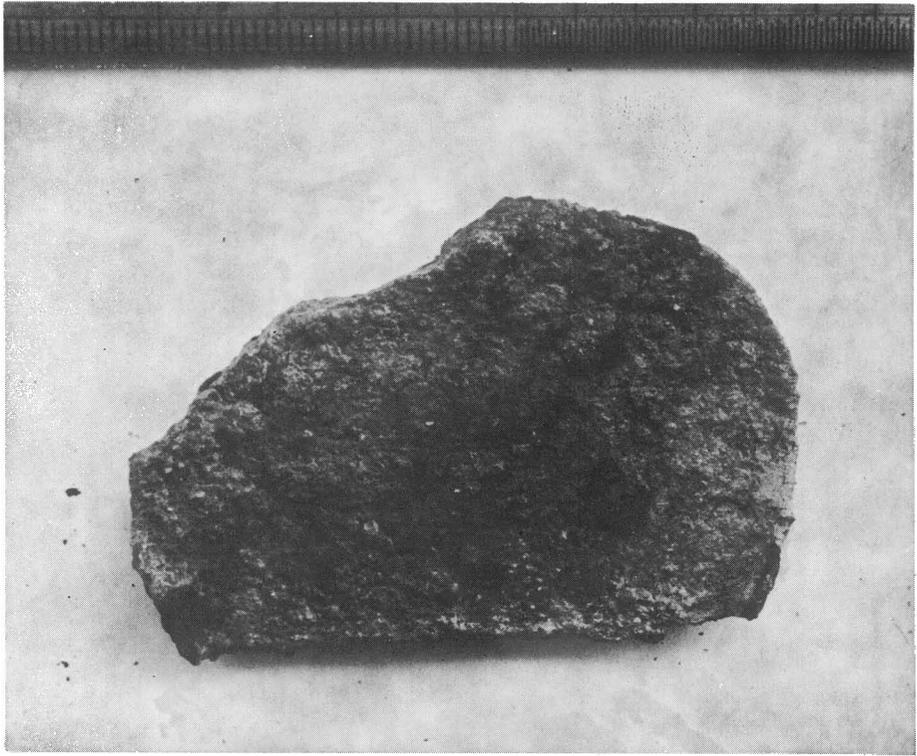


写真-15 鉄 器

(上) 鉄 斧 ？
(下) 不 明 の 鉄 器

揖保郡太子町

山 田 遺 跡

昭和50年3月

執筆者 上田 哲也、中溝 康則
市村 高規、坂口 尚人

編 集 東洋大学姫路高等学校
上 田 哲 也

発 行 建設省姫路工事事務所

印 刷 内海印刷株式会社

